

求
来
里
の
遺
跡
Ⅲ
小
西
遺
跡

求来里の遺跡Ⅲ

— 県営経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(3) —

小西遺跡の調査



日 田 市

日
田
市
埋
蔵
文
化
財
調
査
報
告
書
第
91
集

2
0
1
0
年

日
田
市
教
育
委
員
会

2 0 1 0 年

日 田 市 教 育 委 員 会



求来里川流域遠景（北西から）



調査区遠景（北から）

序 文

求来里地区は日田盆地の東部に位置し、その中央を流れる求来里川によって形成された沖積地に水田が広がる長閑な農業地域であります。

この求来里川流域では平成 14 年度より、圃場整備や市道改良、河川改修工事が実施されるのに伴い、多くの発掘調査が行われ、旧石器時代から近世に至る遺物・遺構が発見されてまいりました。

本書では、圃場整備工事に伴って、平成 16 年度に実施した小西遺跡の調査内容を報告しています。調査では弥生時代後期を中心とした集落が確認され、求来里川流域だけでなく、遺跡北側の台地上に広がる祇園原遺跡など周辺地区の集落との関係を含め、盆地東部の弥生時代後期を考える上で重要な発見がありました。

こうした発掘調査の成果をまとめた本書が、今後の文化財保護や学術研究、地域の歴史を学ぶための教材などとして、ご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に従事いただきました作業員の皆様、地元の方をはじめとして調査にご協力いただきました方々に、心から厚くお礼申し上げます。

平成 22 年 2 月

日田市教育委員会
教育長 合原 多賀雄

例 言

1. 本書は、日田市教育委員会が平成16年度に実施した小西遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、平成16年度に県営経営体育成基盤（圃場整備）整備事業 求来里地区の工事実施に伴い、大分県日田地方振興局（現、大分県西部振興局）の委託業務として、日田市が委託し、日田市教育委員会が事業主体となり実施した。
3. 調査にあたっては、求来里地区圃場整備組合（故）室文明組合長、伊藤或忠副組合長（現、組合長）をはじめ、地元の方々、市経済部農政課（現、農林振興部農業振興課）のご協力を得た。
4. 調査現場での実測は若杉が行った他、雅企画有限会社に委託した。
5. 本書に掲載した遺物実測図は明大工業株式会社に委託したもののほか、若杉が行ったものを使用した。また、製図については、遺物実測図を明大工業株式会社・雅企画有限会社、遺構配置図を除く遺構図を雅企画有限会社に委託し、その成果品を使用した。
6. 遺物実測については、今田秀樹（市文化財保護課）の協力を得た。
7. 空中写真は九州航空株式会社に撮影を委託し、その成果品を使用した。
8. 遺物写真は明大工業株式会社に撮影を委託し、その成果品を使用した。
9. 個別遺構図中の方位は磁北である。
10. 遺物写真に付した番号は、実測図番号に対応する。
11. 出土遺物及び写真、写真類は日田市埋蔵文化財センターで保管している。
12. 本書の執筆は若杉が行った。



日田市の位置

本文目次

I 調査に至る経過と組織	1
(1) 調査に至る経過	1
(2) 調査の組織	2
II 遺跡の立地と環境	4
III 調査の内容	6
(1) 調査の概要	6
(2) 遺構と遺物	6
1. 竪穴住居跡	6
2. 竪穴遺構	25
3. 掘立柱建物	27
4. 土坑	28
5. その他の遺物	41
IV まとめ	43

挿 図 目 次

第 1 図	小浜遺跡周辺地形図 (1/5,000)	1
第 2 図	求来里川流域の主要遺跡分布図 (1/15,000)	5
第 3 図	遺構配置図 (1/200)	7～8
第 4 図	1 号竪穴住居跡平面図 (1/60)	9
第 5 図	1 号竪穴住居跡出土遺物平面図 (1/4)	9
第 6 図	2 号竪穴住居跡平面図 (1/60)	10
第 7 図	2 号竪穴住居跡出土遺物平面図 (1/4)	10
第 8 図	4 号竪穴住居跡平面図 (1/60)	11
第 9 図	4 号竪穴住居跡出土遺物平面図 (1/4)	12
第 10 図	5 号竪穴住居跡平面図 (1/60)	13
第 11 図	5 号竪穴住居跡出土遺物平面図 (1/4)	13
第 12 図	6 号竪穴住居跡平面図 (1/60)	14
第 13 図	6 号竪穴住居跡出土遺物平面図 (1/4)	14
第 14 図	7 号竪穴住居跡平面図 (1/60)	15
第 15 図	7 号竪穴住居跡出土遺物平面図 (1/4)	15
第 16 図	8・9 号竪穴住居跡平面図 (1/60)	16
第 17 図	9 号竪穴住居跡出土遺物平面図 (1/4)	16
第 18 図	12 号竪穴住居跡平面図 (1/60)	17
第 19 図	12 号竪穴住居跡出土遺物平面図 (1/4)	17
第 20 図	13 号竪穴住居跡平面図 (1/60) 及び出土遺物平面図 (1/4)	18
第 21 図	14 号竪穴住居跡平面図 (1/80)	19
第 22 図	14 号竪穴住居跡出土遺物平面図 (1) (1/4)	20
第 23 図	14 号竪穴住居跡出土遺物平面図 (2) (1/4)	21
第 24 図	14 号竪穴住居跡出土遺物平面図 (3) (1/4)	22
第 25 図	14 号竪穴住居跡出土遺物平面図 (4) (1/4)	23
第 26 図	14 号竪穴住居跡出土遺物平面図 (5) (1/4)	24
第 27 図	15・16 号竪穴住居跡平面図 (1/60) 及び出土遺物平面図 (1/4)	25
第 28 図	17 号竪穴住居跡平面図 (1/60)	25
第 29 図	竪穴遺構出土遺物平面図 (1/60)	26
第 30 図	竪穴遺構出土遺物平面図 (1/4)	26
第 31 図	掘立柱建物平面図 (1/80)	27
第 32 図	土坑平面図 (1) (1/40)	29
第 33 図	土坑平面図 (2) (1/40)	31
第 34 図	土坑平面図 (3) (1/40)	33
第 35 図	土坑出土遺物平面図 (1) (1/4)	34
第 36 図	土坑平面図 (4) (1/40)	35
第 37 図	土坑平面図 (5) (1/40)	37
第 38 図	土坑出土遺物平面図 (2) (1/4)	38
第 39 図	土坑平面図 (6) (1/40)	39
第 40 図	土坑出土遺物平面図 (3) (1/4)	39
第 41 図	土坑平面図 (7) (1/40)	40
第 42 図	その他の土器平面図 (1/4)	41
第 43 図	出土石器平面図 (1: 1/1、2～8: 2/3、9～12: 1/2)	42

挿入写真目次

写真1 発掘作業風景	表目次下
写真2 掘立柱建物	2

写真図版目次

巻頭写真図版上 求来里川流域遠景 (北西から)	写真図版 10 上 16 号竪穴住居跡発掘状況 (西から)
下 調査区遠景 (北から)	中 17 号竪穴住居跡発掘状況 (西から)
写真図版 1 上 調査区遠景 (西から)	下 1 号竪穴遺構発掘状況 (南東から)
下 調査区全景 (南から)	写真図版 11 上 掘立柱建物発掘状況 (南東から)
写真図版 2 上 1 号竪穴住居跡発掘状況 (南から)	中 1 号土坑発掘状況 (北東から)
中 1 号竪穴住居跡遺物出土状況	下 2 号土坑発掘状況 (東から)
下 1 号竪穴住居跡遺物出土状況	写真図版 12 上 3 号土坑発掘状況 (北東から)
写真図版 3 上 2 号竪穴住居跡発掘状況 (北東から)	中 5 号土坑発掘状況 (南から)
中 4 号竪穴住居跡発掘状況 (北西から)	下 8 号土坑発掘状況 (東から)
下 4 号竪穴住居跡遺物出土状況	写真図版 13 上 9 号土坑発掘状況 (北西から)
写真図版 4 上 5 号竪穴住居跡発掘状況 (南西から)	中 10 号土坑発掘状況 (西から)
中 5 号竪穴住居跡遺物出土状況	下 12 号土坑発掘状況 (西から)
下 5 号竪穴住居跡遺物出土状況	写真図版 14 上 16 号土坑発掘状況 (南から)
写真図版 5 上 6 号竪穴住居跡発掘状況 (南西から)	中 17 号土坑発掘状況 (北西から)
中 6 号竪穴住居跡遺物出土状況	下 18 号土坑発掘状況 (北東から)
下 6 号竪穴住居跡遺物出土状況	写真図版 15 上 20 号土坑発掘状況 (南から)
写真図版 6 上 7 号竪穴住居跡発掘状況 (北西から)	中 22 号土坑発掘状況 (北西から)
中 7 号竪穴住居跡堀内土坑遺物出土状況	下 24 号土坑発掘状況 (北西から)
下 12 号竪穴住居跡発掘状況 (西から)	写真図版 16 上 27 号土坑発掘状況 (東から)
写真図版 7 上 12 号竪穴住居跡遺物出土状況	中 33 号土坑発掘状況 (南から)
中 13 号竪穴住居跡発掘状況 (北西から)	下 36 号土坑発掘状況 (北西から)
下 13 号竪穴住居跡遺物出土状況	写真図版 17 1, 2, 4, 5 号竪穴住居跡出土遺物
写真図版 8 上 14 号竪穴住居跡発掘状況 (北東から)	写真図版 18 5～7, 12～14 号竪穴住居跡出土遺物
中 14 号竪穴住居跡遺物出土状況	写真図版 19 14 号竪穴住居跡出土遺物
下 14 号竪穴住居跡遺物出土状況	写真図版 20 14 号竪穴住居跡出土遺物
写真図版 9 上 14 号竪穴住居跡遺物出土状況	写真図版 21 14 号竪穴住居跡、3 号竪穴遺構
中 14 号竪穴住居跡遺物出土状況	4, 6, 8 号土坑出土遺物
下 15 号竪穴住居跡発掘状況 (南西から)	写真図版 22 18, 20, 24, 32, 33, 35 号土坑、 その他の出土遺物
	写真図版 23 出土石器

表 目 次

第1表	検出遺構時期変遷表	43
第2表	出土土器観察表(1)	46
第3表	出土土器観察表(2)	47
第4表	出土土器観察表(3)	48
第5表	出土土器観察表(4)	49
第6表	出土石器観察表	49



写真1 発掘作業風景

I 調査に至る経過と組織

(1) 調査に至る経過

県営経営体育成基盤整備事業求来里地区全体の調査の経緯については、「求来里の遺跡Ⅰ」に記述しているので、ここでは省略し、小西遺跡の調査の経緯について述べる。

神来2工区内に存在する小西遺跡の発掘調査は、大分県日田地方振興局耕地課（現大分県西部振興局農林基盤部、以下県耕地課）の工事の進捗に合わせ、平成16年度前半に実施する予定としていた。しかし、この年度は小西遺跡の他に前年度からの継続となる町ノ坪遺跡B区及び金田遺跡・町ノ坪遺跡D区が調査予定になっていたことから、その実施時期が課題となった。当初は、継続調査である町ノ坪遺跡B区と小西遺跡を年度前半に、金田遺跡と町ノ坪遺跡D区を年度後半に行う予定としていた。しかし、県耕地課との協議を進める中で、小西遺跡周辺の用水の関係から休耕時期が平成17年度にずれ込むことになった。このことから、年度前半に金田遺跡の調査を実施し、小西遺跡は町ノ坪遺跡D区とともに稲刈り後の年度後半に調査を行うこととした。契約については、小西遺跡と町ノ坪遺跡D区の調査が同時進行になることから、作業上の利便性や事務手続きの軽減を図る目的で2遺跡での委託契約を結ぶことになった。

以上の経過により、平成16年11月12日に委託契約を取り交わし、11月30日から平成17年3月20日までの予定で、発掘調査に着手した。なお、調査開始後、遺構密度が予想より低かったこと、町ノ坪遺跡D区の調査対象面積が減少したことにより、業務費の減額が生じたものの、天候不順が続き、調査期間の延長が必要となったことから、平成17年3月1日に変更契約を締結した。その後、3月25日に小西遺跡の発掘調査を終了、町ノ坪遺跡D区については、表土剥ぎを一部実施して、次年度の継続調査とした。なお、平成16年度の整理作業は平成17年1月25日から3月25日の間、行った。

以下、平成17年度以降の委託契約の内容と期間を記す。

平成17年度 平成17年4月26日～平成18年3月20日 整理作業(町ノ坪遺跡D区:発掘調査・整理作業)

平成18年度 平成18年4月10日～平成18年12月15日 整理作業(町ノ坪遺跡D区のみ)



第1図 小西遺跡周辺地形図(1/5,000)

その後整理作業が終了したことから、平成20・21年度は報告書作成・印刷業務を行う他の遺跡とともに、契約を一本化した。

平成20年度 平成20年5月7日～
平成21年3月19日 報告書作成
平成21年度 平成21年5月1日～
平成22年3月19日 報告書印刷

また、調査の経過は以下のとおりである。

11月30日 機械による耕作土除去開始
12月10日 耕作土除去終了
12月14日 遺構検出開始
1月5日 遺構掘り下げ開始
1月11日 基準点測量実施
1月12日 遺構実測開始
2月上旬 積雪のため、調査を数日中断
(3月8日 町ノ坪遺跡D区の耕作土除去開始)
3月19日 空中写真撮影実施
3月25日 器材整理・撤収を行い、調査終了

調査終了後の3月31日に日田警察署長宛に埋蔵文化財発見届を提出し、4月19日に埋蔵文化財の認定を受けた。



写真2 掘立柱建物跡

(2) 調査の組織

調査関係者は以下のとおりである。(なお、職名・氏名は当時のままとしている)

平成16年度(2004)ノ発掘調査・整理作業

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 諫山康雄(日田市教育委員会教育長)

調査統括 後藤 清(日田市教育庁文化課長)

調査事務 高倉隆人(日田市教育庁文化課課長補佐兼埋蔵文化財係長)

伊藤京子(同専門員)、中村邦宏(同主事補)

調査担当 若杉竜太(日田市教育庁文化課主任)

調査員 土居和幸(日田市教育庁文化課主査) 行時桂子、渡邊隆行(以上、同主事)

発掘作業員 足立米子 穴井生海 穴井正利 安藤一枝 諫元正隆 石谷アサカ 江藤キミ子
荏隈アイ子 荏隈マサ子 鍛冶谷健史 河津定雄 河津信義 河津満子 河津モリ
河部松子 北澤幾子 小下一 五島絹代 財津勲子 財津高子 定賀和子 庄内武子
高倉エミ子 高倉美津子 高野隆 田中傳江 谷口芳枝 中川照美 中島カズ子
信岡アイ子 藤本弥八 松岡敦子 本松シツエ 森本絹子 吉長利夫
整理作業員 穴井トヨ子 梶原ヒトエ 坂本和代 安元百合

平成 17 年度 (2005) / 整理作業

調査主体 日田市教育委員会
調査責任者 諫山康雄 (日田市教育委員会教育長)
調査統括 後藤 清 (日田市教育庁文化財保護課長)
調査事務 高倉隆人 (日田市教育庁文化財保護課課長補佐兼埋蔵文化財係長)
伊藤京子 (同専門員)、中村邦宏 (同主事補)
整理担当 若杉竜太 (日田市教育庁文化財保護課主任)
調査員 土居和幸 (日田市教育庁文化財保護課副主幹)
今田秀樹、行時桂子、渡邊隆行 (以上、同主任)、矢羽田幸宏 (同主事補)
整理作業員 穴井トヨ子 井上とし子 宇野富子 梶原ヒトエ 川原君子 黒木千鶴子 坂口豊子
佐藤みち子 武石和美 田中静香 中原琴枝 聖川暢子 安元百合 吉田千津子

平成 20 年度 (2008) / 報告書作成

調査主体 日田市教育委員会
調査責任者 合原多賀雄 (日田市教育委員会教育長)
調査統括 原田文利 (日田市教育庁文化財保護課長)
調査事務 井上正一郎 (日田市教育庁文化財保護課課長補佐兼埋蔵文化財係長)
田中正勝 (同専門員)、塚原美保 (同主査)
報告書担当 若杉竜太 (日田市教育庁文化財保護課主任)
調査員 今田秀樹、行時桂子 (以上、日田市教育庁文化財保護課主査)
渡邊隆行 (同主任)、矢羽田幸宏 (同主事)、比嘉えりか (同嘱託)

平成 21 年度 (2009) / 報告書印刷

調査主体 日田市教育委員会
調査責任者 合原多賀雄 (日田市教育委員会教育長)
調査統括 原田文利 (日田市教育庁文化財保護課長)
調査事務 北村羊 (日田市教育庁文化財保護課主幹兼埋蔵文化財係長)
河津美広 (同専門員)、塚原美保 (同主査)
報告書担当 若杉竜太 (日田市教育庁文化財保護課主任)
調査員 今田秀樹、行時桂子 (以上、日田市教育庁文化財保護課主査)
渡邊隆行 (同主任)、矢羽田幸宏 (同主事)、比嘉えりか (同嘱託)

II 遺跡の立地と環境

小西遺跡の所在する求来里地区は盆地の東部に位置し、大字東有田大石砦を源とする求来里川により形成された沖積地が狭い谷状の地形を呈している。求来里川は谷の中で大きく蛇行を繰り返しながら、北西方向に流れ、遺跡の北約2kmの地点で有田川と合流する。

求来里地区及び求来里川流域では、圃場整備事業に伴って行われた発掘調査の他にも、広域農道建設や市道建設などによる発掘調査が行われている。ここでは、それらの遺跡を中心に周辺の遺跡を概観していく。

小西遺跡より南側200mの台地裾には、弥生時代中期から古墳時代後期を中心とする集落が確認された金田遺跡(2)が存在する。また、遺跡の北東側には町ノ坪遺跡(3)が存在する。調査では古墳時代中期～後期の集落が確認された。これらの遺跡では、特に古墳時代中期の集落において朝倉産や陶邑産の初期須恵器や朝鮮半島系土器が出土しており、カマド導入期の集落の様相が窺うことができる。

町ノ坪遺跡南側には、縄文時代の竪穴遺構や古墳時代の集落、中世の四面庇の建物が見つかった求来里平高遺跡(4)が存在する。古墳時代中期の住居は金田遺跡や町ノ坪遺跡と同様に導入期カマドを備えることで注目される。さらに求来里平高遺跡の南側には弥生時代・古墳時代の包蔵地である着来遺跡(5)がある。着来遺跡の東側、求来里川が形成する谷の最奥部には縄文時代前期の包含層、古墳時代後期～終末期の集落や中世の墓地在確認された名里遺跡(6)が存在する。

一方、谷の北側には町野原台地が広がり、台地一帯は旧石器時代・縄文時代・古墳時代の包蔵地である町野原遺跡(7)が存在する。また、台地の南東側に円墳の亀ノ甲古墳(8)、さらに台地から西側に派生し、小西遺跡背後にあたる丘陵上には、横穴式石室を主体とし、3基の円墳からなるガニタ古墳群(10～12)がある。

また、谷南側の元宮原台地上には弥生時代後期の豊棺墓・石棺墓や古墳時代後期の石蓋土坑墓、中世の塚と笠塔婆などが見つかった元宮遺跡(13)が存在する。弥生時代～古墳時代にかけての墓地在は、求来里川流域に展開する同時期の集落との関係を想起させる。

さらに、求来里地区から求来里川を下流に下った有田地区でも、沖積地及び周辺の丘陵上に多くの遺跡がみられる。小西遺跡の西約600mの丘陵上には古墳時代の集落や古代の土坑墓が見つかった馬形遺跡(16)がある。さらに下流の沖積地及び微高地上には、縄文時代後期の埋裏や平安時代の竪穴遺構が確認された森ノ元遺跡(17)や弥生時代の墓地や古墳時代の集落、300枚を超える六道銭が埋納された土坑墓が確認された尾漕遺跡(18)が存在する。さらに求来里川右岸の台地上には、弥生時代から古墳時代にかけての集落や近世墓群が見つかった紙園原遺跡(24)、古墳時代から古代を中心として集落が確認された長迫遺跡(19)、古墳時代後期の横穴式石室を主体とする塔ノ木1号墳(21)などが存在する。一方、左岸の台地上には古墳時代の土坑墓・石蓋土坑墓・石棺墓などが確認された大迫遺跡(38)や3基の円墳からなる中尾古墳群(36.37)が存在する。

(参考文献)

『平成15～18年度日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2004～2008

村上久和・友阿信彦・泉久未徳編『日田系埋蔵文化財調査報告書(6)大分県教育委員会 1997』

行時志郎編『森ノ元遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第13集 日田市教育委員会 1998

土居和幸・行時志郎・永田裕久編『馬形遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第16集 日田市教育委員会 1998

友阿信彦・松本康弘『佐守原遺跡・尾漕遺跡群・有田塚ヶ原古墳群』九州橋新自動車道開通埋蔵文化財発掘調査報告書(9)大分県教育委員会 1998

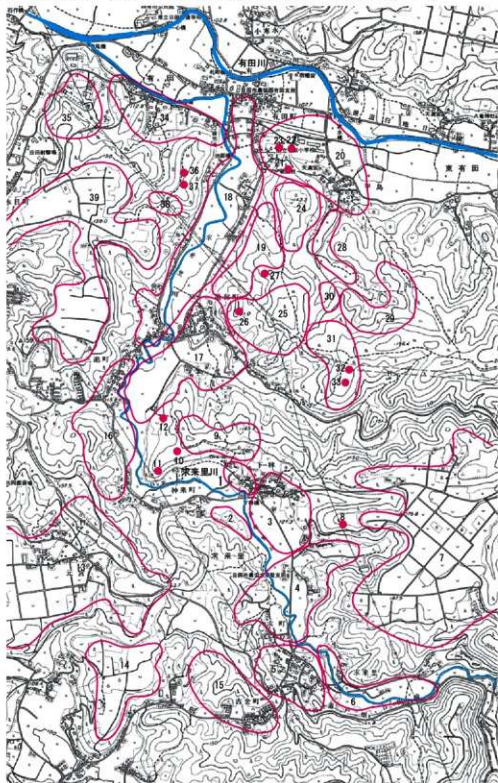
村上久和・原田興一編『尾漕遺跡』大分県文化財調査報告書第112集 大分県教育委員会 2000

若杉竜太郎編『平高遺跡D地点 塔ノ木古墳 紙園原遺跡2次 長迫遺跡C地点 長迫遺跡D地点 尾漕遺跡6次』日田市埋蔵文化財調査報告書第28集 日田市教育委員会 2001

行時志郎編『尾漕遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第30集 日田市教育委員会 2001

土居和幸編『求来里平高遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第38集 日田市教育委員会 2003

- 行時桂子編『尾漕2号墳』日田市埋蔵文化財調査報告書第69集 日田市教育委員会 2006
- 行時桂子編『求来里平島遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第77集 日田市教育委員会 2007
- 行時桂子編『裾野原遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第81集 日田市教育委員会 2007
- 行時桂子編『裾野原遺跡Ⅲ』日田市埋蔵文化財調査報告書第87集 日田市教育委員会 2008
- 田中裕介・原田剛一・松本康弘編『求来里平島遺跡D区、求来里名里遺跡A区1次調査区、金田遺跡1次調査区、金田遺跡3次調査区』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第31集 大分県教育庁埋蔵文化財センター 2008
- 渡邊隆行編『求来里の遺跡Ⅰ 町ノ坪遺跡B区』日田市埋蔵文化財調査報告書第88集 日田市教育委員会 2009
- 若杉竜太編『求来里の遺跡Ⅱ 金田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第89集 日田市教育委員会 2009



第2図 求来里川流域の主要遺跡分布図 (1/15,000)

- 1 小西遺跡
 - 2 金田遺跡
 - 3 町ノ坪遺跡
 - 4 求来里平島遺跡
 - 5 着来遺跡
 - 6 名里遺跡
 - 7 町野原遺跡
 - 8 亀ノ甲古墳
 - 9 倉迫遺跡
 - 10 ガニタ1号墳
 - 11 ガニタ2号墳
 - 12 ガニタ3号墳
 - 13 元宮遺跡
 - 14 東寺原遺跡
 - 15 古金遺跡
 - 16 馬形遺跡
 - 17 森ノ元遺跡
 - 18 尾漕遺跡
 - 19 長倉遺跡
 - 20 平島遺跡
 - 21 塔ノ本1号墳
 - 22 塔ノ本2号墳
 - 23 塔ノ本3号墳
 - 24 裾野原遺跡
 - 25 狐山遺跡
 - 26 尾漕1号墳
 - 27 尾漕2号墳
 - 28 石ヶ道遺跡
 - 29 平島横丁遺跡群
 - 30 クビリ遺跡
 - 31 有田塚ヶ原遺跡
 - 32 ツカヶ原1号墳
 - 33 ツカヶ原2号墳
 - 34 宮ノ下遺跡
 - 35 堂山遺跡
 - 36 中尾1号墳
 - 37 中尾2号墳
 - 38 大尾遺跡
 - 39 中尾原遺跡
- ※本文中の邦字施設名は分
 館の番号に対応

Ⅲ 調査の内容

(1) 調査の概要 (第3図)

調査は北西-南東方向が長さ約80m、幅約15~20m、北東-南西方向が長さ約55m、幅約7~8mの逆「L」字形の調査区で行なった。遺構検出面は暗黄色系の粘質土で、水田基盤土より約10~20cm下で確認された。なお、調査区の北西端は、約1m削平をうけており、遺構等は確認されなかった。調査区内の標高は北東側は120.5~122.5mで最も高くなっていた。また、調査区内をA8~G13までグリッドで区画し、遺構検出時や遺物の取上げ等で利用している。

調査では、竪穴住居跡14軒、竪穴遺構3基、掘立柱建物1棟、土坑37基、その他柱穴・ピット等が多数確認された。調査中、竪穴住居跡や土坑として遺物の取上げ等を行っていた遺構があるが、その後、切り合い関係や竪穴住居跡と判断するには材料に乏しかったことから、竪穴遺構としたものがある。また、土坑については、攪乱と判断したものがあり、それらの遺構番号については欠番としている。(欠番・・・竪穴住居跡:3.10.11号、土坑:13.25.26.38.41.42号)

(2) 遺構と遺物

1. 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡 (第4図 図版2)

調査区の東側、B9・C9グリッド付近で確認された。平面形は長方形を呈し、南壁以外の壁際にはベッド状遺構がみられる。規模は東西軸約7.1m、南北軸約5.3m、深さはベッド状遺構まで約15cm、床面まで約30cmを測る。床面の中央付近にはが跡とみられる落ち込み、南壁際には屋内土坑がみられる。また、一部の壁際には周溝が掘り込まれている。主柱穴はP1~P4の4本と考えられ、その深さは48~63cmである。

遺物は弥生土器裏、高坏、鉢が出土している。

出土遺物 (第5図 図版17)

1・2は裏である。1の口縁部は外傾して短く立ち上がり、端部は角張らせて仕上げる。3・4は鉢である。3は外面にタタキが見られ、底部は尖り気味である。4は口縁端部を鋭く、角張らせて仕上げ、底部は平底気味である。5・7は高坏である。5は脚部か。端部の器壁は厚く仕上げ、端部は丸味を帯びる。6は坏部が深く、口縁部は外に開くが、端部をやや内湾させて仕上げる。脚部は低く、端部はやや内湾する。7は脚部である。上面は坏部との接合部の調整が残る。裾近くには穿孔が施されるが、数は不明である。

2号竪穴住居跡 (第6図 図版3)

調査区中央、D9・D10グリッド付近で確認され、4号竪穴住居跡、3号竪穴遺構を切り、7・10・22号土坑を切る。平面形は台形状を呈する。規模は北東壁で約3.5m、南西壁で約4.0m、北西-南東軸で約4.0m、床面までの深さは約20cmを測る。床面は礫混じりの締まった土で、が跡らしき焼土は確認できなかったが、南西壁際に屋内土坑がみられる。主柱穴はP1・P2に2本と考えられ、深さはP1は19cmであるが、P2については周囲に別の掘り込みがあり、床面が明確ではないが、推定でおよそ40cmとみられる。

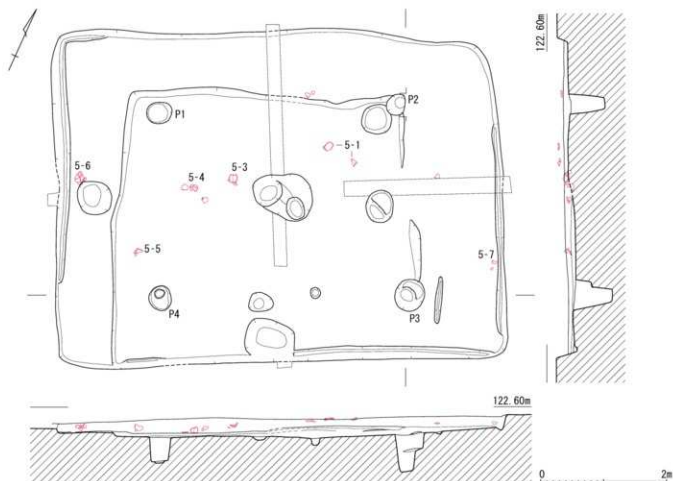
遺物は弥生土器裏・壺が出土している。

出土遺物 (第7図 図版17)

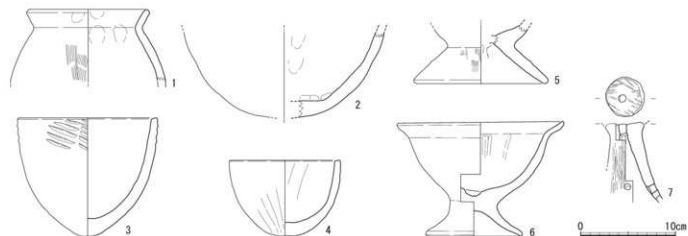
1は壺である。口縁部はやや外傾して立ち上がり、端部は丸味を帯びる。4は長頸壺の口縁部である。端部に刻み目を施す。5は壺の胴部である。断面台形の刻み目突帯を貼り付ける。



第3図 遺構配置図(1/200)



第4図 1号竪穴住居跡実測図 (1/60)

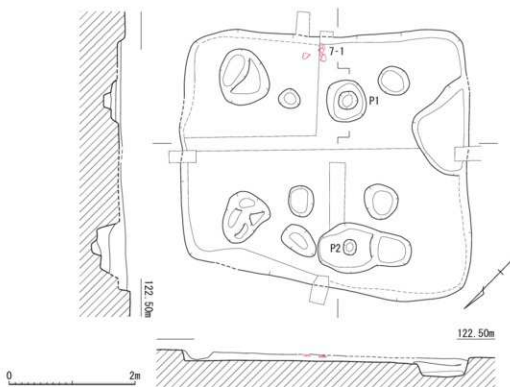


第5図 1号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/4)

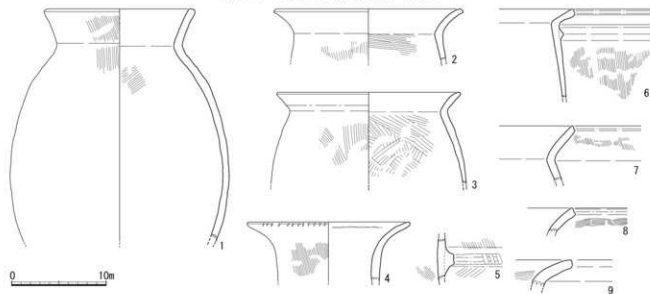
2・3・6～9は甕である。2は口縁部が外反して立ち上がる。6～8は口縁端部に沈線状に窪ませている。

4号竪穴住居跡 (第8図 図版3)

C9・D9グリッド付近で確認され、2・5号竪穴住居跡、3号竪穴遺構、16・33号土坑に切られる。そのため、北半分と南西側は削平されているが、平面形は方形を呈するとみられる。その規模は北東-南西軸で約5.9m、北西-南東軸で約6.1m、床面までの深さは約20cmを測る。床面中央よりやや南東寄りには焼土が確認され、住居跡の可能性があるが、部分的なため断定できない。また、南西壁際に屋内土坑が見られる。主柱穴はP1～P



第6図 2号竪穴住居跡実測図 (1/60)



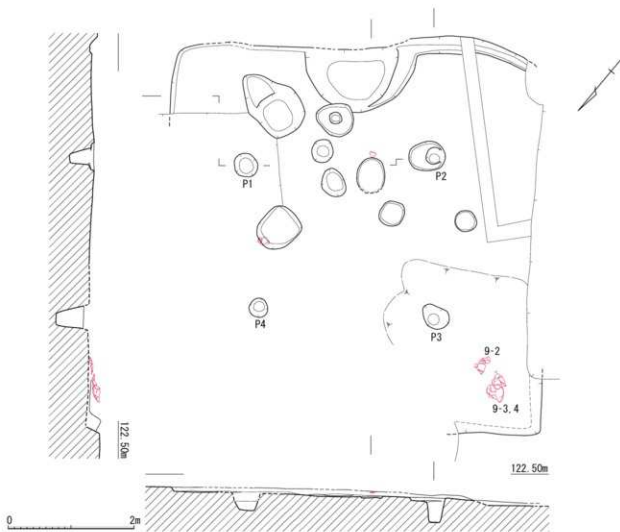
第7図 2号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/4)

4の4本と考えられ、深さは28～40cmを測る。

遺物は弥生土器甕・壺・鉢・高環などが出土している。

出土遺物 (第9図 図版17)

1～3は弥生土器甕である。1は口縁内面がやや膨らみながら立ち上がる。2は胴部の張りが少なく、頸部に刻み目を施す断面三角形の突帯を貼り付ける。胴部外面は、タタキ痕が明瞭に残っている。3も2と同様に胴部の張りが少なく、外面に明瞭なタタキ痕が残る。4は壺と思われる。外面胴部付近はタタキ痕が明瞭に残り、底部にかけてはハケ調整を施す。5は鉢である。口縁端部を丸く仕上げる。6は甕の底部か。7は高環である。8は壺である。口縁部は大きく外反し、端部に刻み目を施す。9～11は高環脚部である。9、10は円形の穿孔を施す。



第8図 4号竪穴住居跡実測図 (1/60)

5号竪穴住居跡 (第10図 図版4)

4号竪穴住居跡の南西側で確認され、この4号竪穴住居跡を切り、33号土坑に切られる。南西側が調査区外へ広がるが、平面形は方形を呈するとみられる。規模は北西・南東軸で約4.6m、北西壁側で調査区内での長さ約2.8mを測る。また、北東側と南東側にはベッド状遺構がみられ、深さはベッド状遺構までが20cm、床面までが約40cmを測る。床面の中央付近に土坑状の落ち込みが見られ、炉跡の可能性はある。主柱穴はP1・P2と考えられ、位置関係から4本柱であったと思われる。

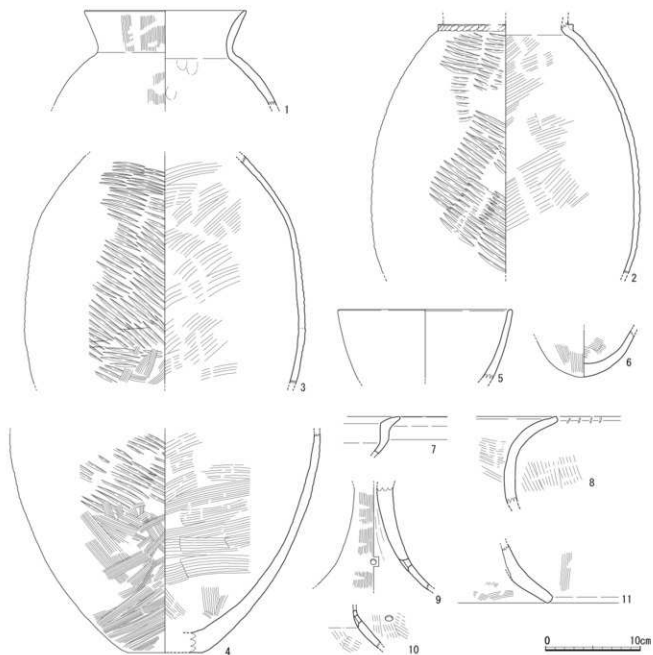
遺物の多くはP1付近で床面より30～40cm浮いた状態で、弥生土器喪等が出土した。

出土遺物 (第11図 図版17・18)

1～5は弥生土器喪である。1は口縁端部が沈線状に凹む。2は口縁部が1に比べて、大きく傾いて開く。外面の胴部上半にタタキ痕が明瞭に残っている。4は口縁部がほとんど開かず立ち上がり、胴部の張りもない。6は壺である。7は喪の底部か。8は鉢である。

6号竪穴住居跡 (第12図 図版5)

5号竪穴住居跡の東側で確認され、4号竪穴住居跡に切られる。南西側が調査区外へ広がり、平面形は方形を呈するとみられる。規模は北東・南西軸で約4.0m、北東・南西軸で約3.2m+aを測る。北東側には幅約1.5mのベッド状遺構がみられるが、大きく攪乱を受けている。深さはこのベッド状遺構までが約20cm、床面までが約30cmを測る。主柱穴については、確実なものが確認されなかったが、床面の北西寄りに焼土が見られ、炉



第9図 4号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/4)

が付近にあった可能性があることから住居と判断した。

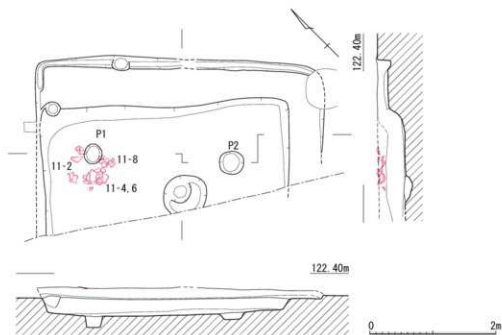
遺物は弥生土器甕・壺などが出土している。

出土遺物(第13図 図版18)

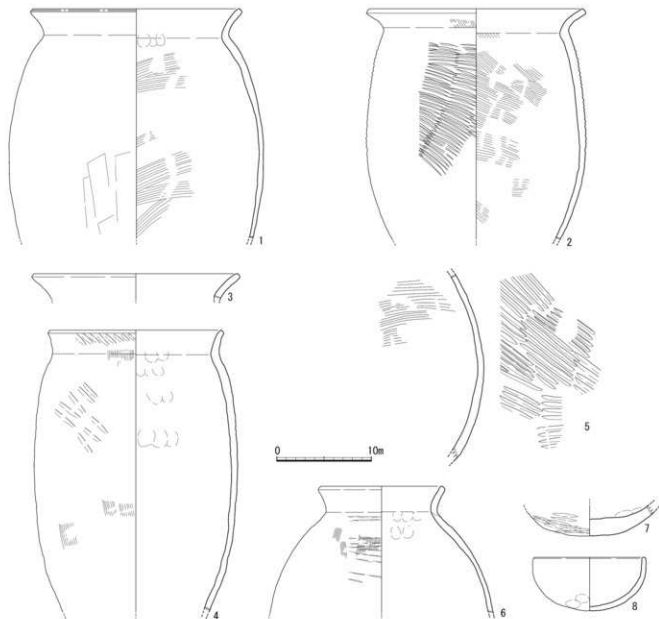
1は弥生土器甕である。口縁部は大きく外反し、端部は胴部より外に出る。2は壺である。胴部が大きく横に張る。3・4は縄文土器鉢である。口縁端部を外側につまみ出すように仕上げる。5は弥生土器高坏である。口縁端部を内側に折り曲げるように仕上げています。

7号竪穴住居跡(第14図 図版6)

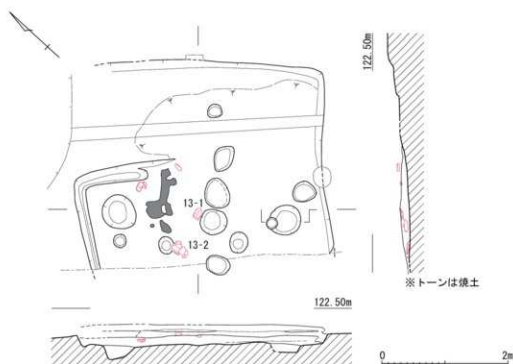
2号竪穴住居跡の西側で確認され、2、8、9号竪穴住居跡を切る。南西側は削平を受けているものの、平面



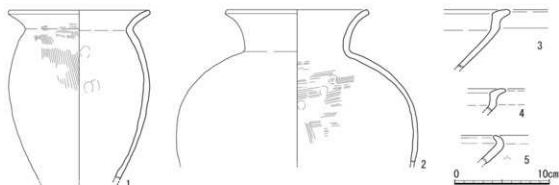
第10图 5号竖穴住居跡実測図 (1/60)



第11图 5号竖穴住居跡出土遺物実測図 (1/4)



第12図 6号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第13図 6号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/4)

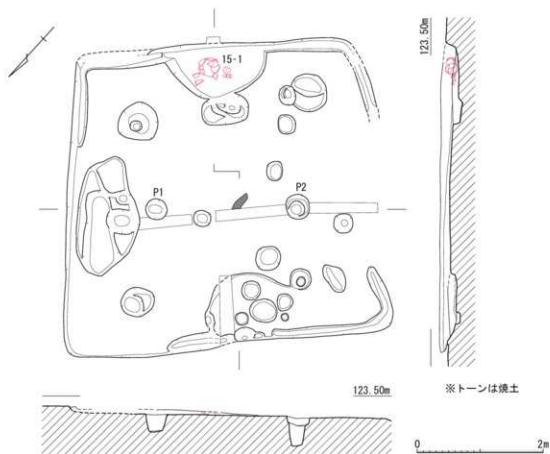
形は台形気味の方形をする。規模は南東壁で約4.4m、北西壁で約5.2m、北西-南東軸で約4.9m、深さは床面まで約10cmを測る。床面の中央付近には炉跡とみられる焼土、南西壁際には屋内土坑がみられる。また、北側を除く壁際には周溝が掘り込まれている。主柱穴はP1、P2の2本と考えられ、その深さは28、46cmである。遺物は弥生土器甕などが出土している。

出土遺物 (第15図 図版18)

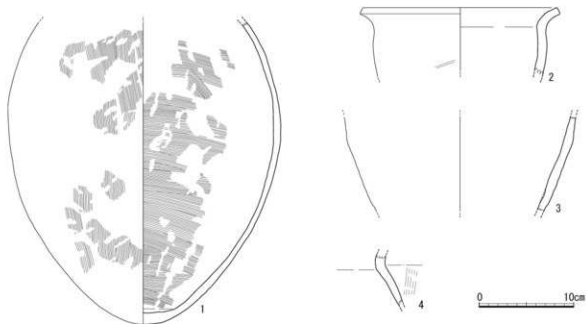
1は弥生土器甕である。底部は丸底である。2は弥生土器の小型甕である。口縁部は胴部より開いて立ち上がり、端部を角張らせて仕上げる。3は縄文土器の深鉢であるが、傾きは確実ではない。4は土師器の甕である。

8号竪穴住居跡 (第16図)

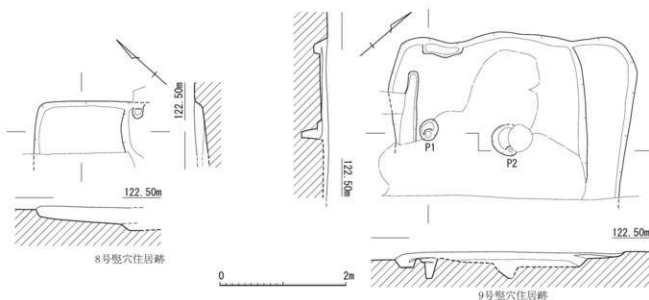
7号竪穴住居跡の東側で確認され、大部分は2・7号竪穴住居に切られる。北側隅しか残っていないが、平面形は方形を呈することはわかる。規模は北東壁で約1.4m、北西壁で約0.8mが残存する。南東側にはベッド状遺構とみられる一段の落ち込みが確認されたが、はっきりしない。この一段目までの深さは15～20cmを



第14図 7号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第15図 7号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/4)



第16図 8・9号竪穴住居跡実測図(1/60)

測る。

遺物は出土したが、実測可能なものはなかった。

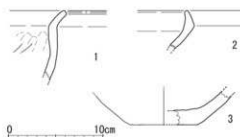
9号竪穴住居跡(第16図)

7号竪穴住居跡の北西側で確認された。南東側は7号竪穴住居跡に切られるほか、32号土坑にも切れ、床面の大部分残っていない。平面形は方形を呈するとみられ、規模は北西壁で約3.5m、南東壁で約2.6m+aを測る。北東側にはベッド状遺構が見られ、北西壁・南西壁の周溝が掘り込まれている。主柱穴はP1、P2の2本と考えられ、深さはそれぞれ約30、20cmを測る。

遺物は弥生土器の甕・壺が出土している。

出土遺物(第17図)

1は弥生土器小型甕である。口縁端部を沈線状に窪ませている。2は高環口縁部か。端部がやや内側に傾く。3は甕の底部か。底面は平底である。



第17図 9号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/4)

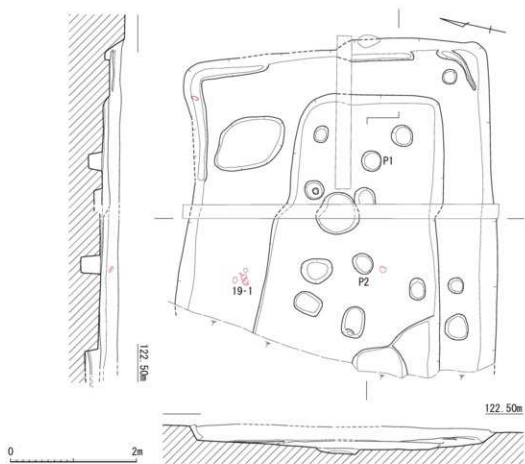
12号竪穴住居(第18図 図版6・7)

調査区の北西側で確認され、17号竪穴住居跡を切り、18号土坑に切られる。西側は削平を受けており、規模は南北軸約4.9m、東西軸約4.9m+aを測ることから、平面形は長方形を呈するとみられる。削平を受けている西側以外の壁にはベッド状遺構がみられ、深さはベッド状遺構までが約15cm、床面までが30~35cmを測る。ベッド状遺構の壁際には北側から東側にかけて、周溝がみられる。主柱穴はP1、P2の2本とみられ、深さはそれぞれ22、30cmを測る。

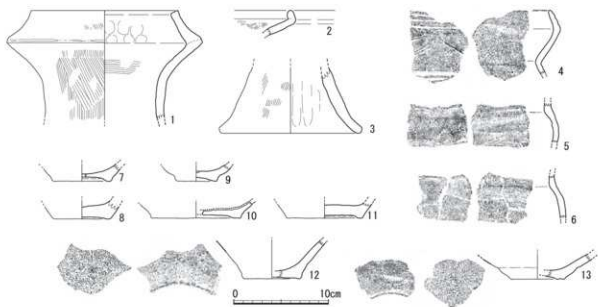
遺物は弥生土器甕・器台のほか、縄文土器深鉢等が出土している。

出土遺物(第19図 図版18)

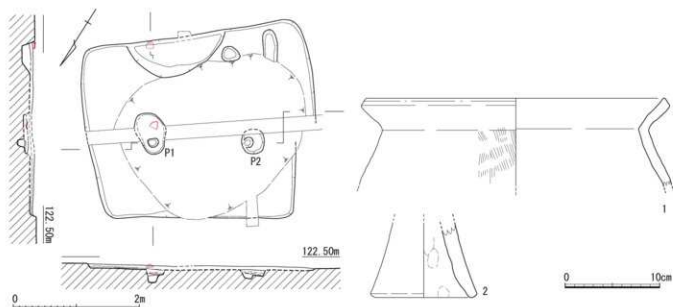
1は弥生土器甕の二重口縁部である。屈曲は強く、上部口縁は内傾して立ち上がる。端部は角張らせて仕上げる。下部は比較的長めに頸部に向かう。2は高環口縁部か。端部はつまみ出すように立ち上がり、端部は丸く仕上げる。3は器台である。脚端部より、1.5cmほど上位で外側にわずかに屈曲し、端部は比較的角張らせて仕上げていく。



第 18 图 12 号竖穴住居跡実測図 (1/60)



第 19 图 12 号竖穴住居跡出土遺物実測図 (1/4)



第20図 13号竪穴住居跡実測図(1/60)及び出土物実測図(1/4)

4～6は縄文土器深鉢である。4は外面の口縁端部に3条の沈線、屈曲部の下部にも沈線が見られる。7～13は縄文土器の底部である。いずれも上げ底である。

13号竪穴住居跡(第20図 図版7)

12号竪穴住居跡の北側で確認され、14号竪穴住居を切る。住居の大部分は削平を受けているが、南西側に張り出し部を持つ、方形の平面を呈する住居である。規模は北壁で約2.9m、南壁で約3.4m、南北軸は約2.8m、床面までの深さは約10cmを測る。床面は黄褐色砂質土で、南壁際には屋内土坑がみられる。主柱穴はP1、P2の2本と考えられ、床面からの深さは推定で約20、15cmである。

遺物は弥生土器器台、甕が出土している。

出土遺物(第20図)

1は弥生土器甕である。口縁部は直線的に外傾し、やや膨らみをもって立ち上がり、端部を肥厚させる。2は器台の底部である。開きは小さい。

14号竪穴住居跡(第21図 図版8・9)

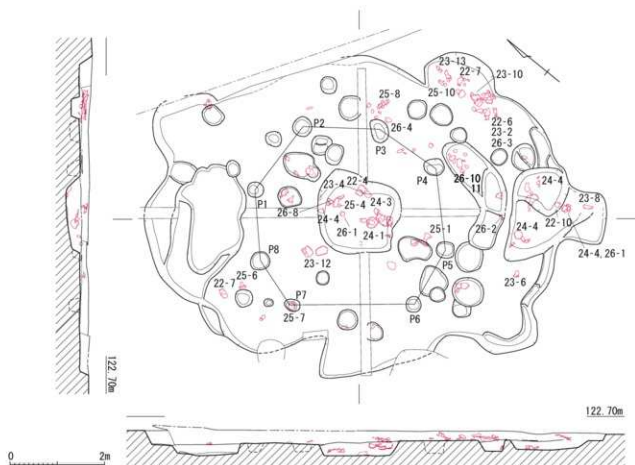
調査区の北側、E12グリッド付近で確認され、13号竪穴住居に切られる。平面形は張り出し状の突出部がみられ、不定形ではあるが楕円形に近い形状を呈する。規模は北西-南東軸で約9.7m、北東-南西軸で約6.8m、床面までの深さは約30cmを測る。床面にはピットが多数、土坑状の掘り込みが数箇所に確認された。ピットのうち、円形に展開するP1～8が主柱穴になると考えられる。床面からの深さは12～25cmである。また、炉跡とみられる焼土・炭等は確認できなかった。

遺物は弥生土器甕・壺・器台・高坏・鉢など大量に出土した。

出土遺物(第22～26図 図版18～21)

第22図はすべて弥生土器甕である。2は口縁端部を薄く仕上げ、胴部より外に張り出す。頸部付近はハケ調整後、タタキにより成形し、その痕跡が明瞭に残る。3は小型甕である。口縁部は短く外傾する。5は胴部の張りが殆んどなく、直線的になる。6は口縁端部を沈線状に窪ませる。

第23図1～4は弥生土器甕である。1は断面三角形の突帯を貼り付ける。2の底部はレンズ状を呈する。5

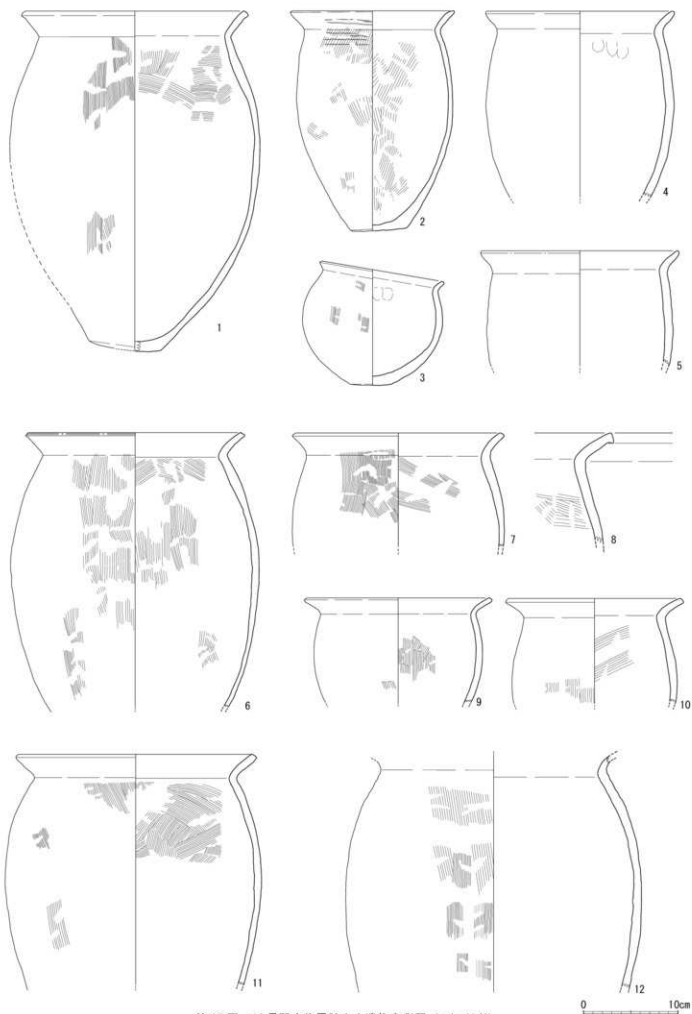


第21図 14号竪穴住居跡実測図 (1/80)

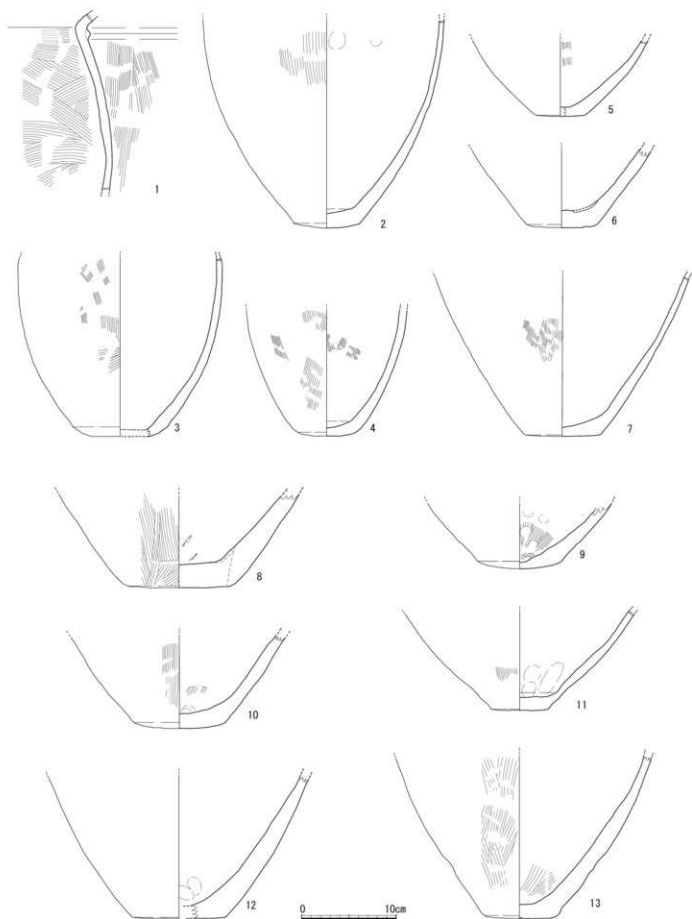
～13は弥生土器壺である。11・13は底部端より急角度で立ち上がり、外に開く。

第24図はすべて弥生土器壺である。1は完形である。頸部は緩やかに屈曲し、小さく開く。口縁端部は角張り、肥厚する。胴部は中位よりやや上で最大径を測り、底部はレンズ状を呈する。頸部下には波形の線刻が見られ、蛇か龍を模したようにも見える。2は無頸壺である。外面下部にはケズリの痕跡が見られる。3は小型の壺である。口縁端部は丸く仕上げる。4は完形の二重口縁壺である。上部口縁は直立し、端部を丸く仕上げる。頸部の屈曲は緩やかで、断面三角形の突帯には刻み目が施される。胴部は中位付近で最大径をはかる。5は口縁部は短く立ち上がり、端部を肥厚させる。頸部の屈曲は緩やかで胴部は大きく張る。6は肥厚させた口縁端部に沈線状の窪みを施し、断面三角形の突帯を貼り付ける。7は二重口縁壺である。上部口縁はやや内傾しながら立ち上がり、端部は角張り、屈曲部は明瞭である。9は長頸壺である。口縁は直立し、頸部には断面三角形の突帯を貼り付ける。10は断面三角形の突帯に刻み目を施す。11は長頸壺か。

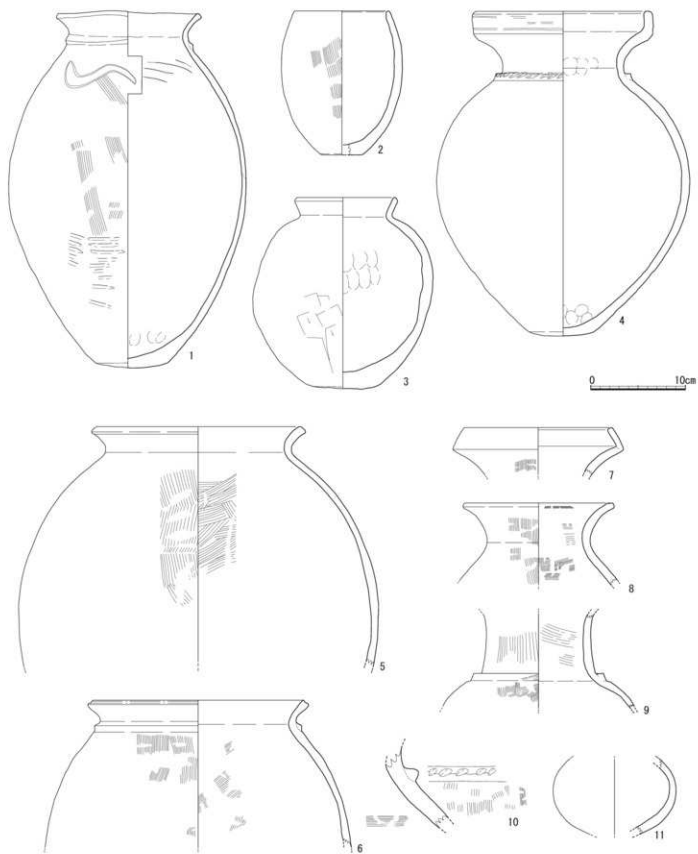
第25図はすべて弥生土器高環である。1は完形である。環部屈曲より口縁がほぼ直立し、端部は三角形気味に仕上げる。頸部はあまり開かない。2は環部屈曲より、若干外に開きながら立ち上がり、端部を丸く仕上げる。3～5は何れも高環のみである。3は口縁端部をつまみ出すように内傾させる。4は同じく端部をつまみ出すように直立させ、丸く仕上げる。内面にはミガキが施される。5は口縁端部やや内傾させながら、丸く仕上げる。6は比較的細い脚部上位から下部にかけて大きく開く。7は脚端部へ向かって、ラッパ状に開く。内面にはケズリ状の調整痕が見られる。10は脚部下に穿孔を施す。12は環部と脚部の接合部に断面台形の突帯を貼り付ける。



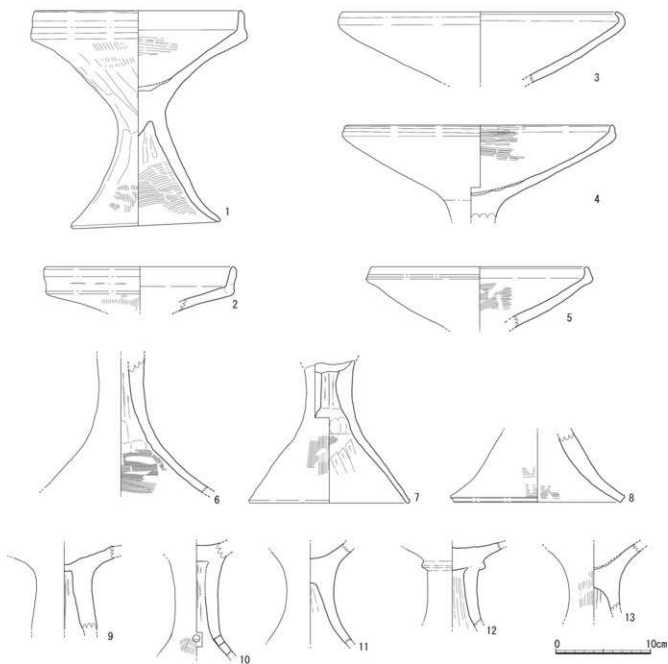
第 22 图 14 号竖穴住居跡出土遺物実測圖 (1) (1/4)



第 23 图 14 号竖穴住居跡出土物实测图 (2) (1/4)



第 24 图 14 号竖穴住居跡出土遺物実測図 (3) (1/4)



第25図 14号竪穴住居跡出土遺物実測図(4)(1/4)

第26図1～7は弥生土器鉢である。1は口縁端部をわずかに外反させ、底部は尖底気味に仕上げる。2は口縁部に向かって大きく開き、外面・内面ともにミガキが施される。4は底部端から直立気味立ち上がり、口縁部も大きくは開かない。7も底部が4と類似しており、口縁部も同様に形態になるとみられる。6は完形であるが、大きくひずむ。

8～12は弥生土器器台である。8は水平気味になるまで、口縁が大きく外反する。8・12は縦方向のナデがみられる。10は脚部が大きく開かない。11は口縁部が短く開き、底部も同様になるとと思われる。13は弥生土器支脚である。口縁は厚く、丸味を帯びて仕上げる。

15号竪穴住居跡

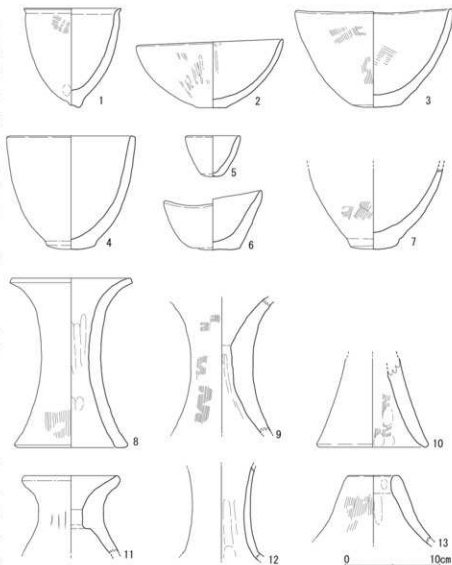
(第27図 図版9)

3号竪穴遺構の北東側で確認され、7号土坑に切られる。東側は調査区外へ広がり、平面形は方形を呈するとみられ、南東側には張り出し部をもつ。規模は北西-南東軸で約3.1m、北東-南西軸で約2.2m、床面までの深さは5~10cmを測る。P1やP2が主柱穴となる可能性があるが、位置関係から確実なものはいえない。

遺物は弥生土器表が出土している。

出土遺物 (第27図)

第25図1は弥生土器表である。口縁部が大きく開き、端部を肥厚させる。



第26図 14号竪穴住居跡出土遺物実測図(5) (1/4)

16号竪穴住居跡

(第27図 図版10)

14号竪穴住居跡の北側で確認された。北東側は調査区外へ広がり、平面形は方形を呈すると考えられる。規模は南壁側で約 $2.6m + a$ 、西壁側で約 $2.4m + a$ 、床面までの深さは10~15cmを測る。壁際には一部周溝が掘り込まれている。主柱穴、屋内土坑等は確認できなかった。

遺物は弥生土器表が出土している。

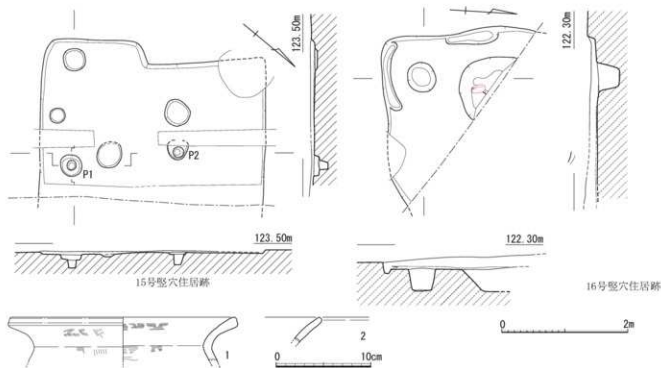
出土遺物 (第25図)

第25図2は弥生土器表である。

関7号竪穴住居跡 (第28図 図版10)

E11グリッドの西側で確認され、北側を12号竪穴住居跡に切れ、西側は削平を受けている。平面形は方形を呈するとみられ、規模は南北軸約 $2.5m + a$ 、東西軸約 $1.7m + a$ 、床面までの深さは約10cmを測る。東壁際には部分的に周溝が掘り込まれている。また、P1が壁との位置関係から主柱穴のうちの1本になると考えられ、床面からの深さは31cmを測る。

遺物は出土しなかった。



第27図 15・16号竪穴住居跡実測図(1/60)及び出土遺物実測図(1/4)

2. 竪穴遺構

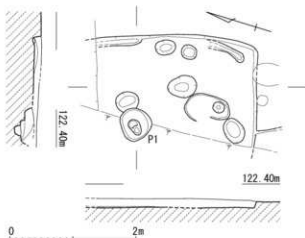
1号竪穴遺構(第29図 図版10)

15号竪穴住居跡の西側で確認された。平面形は不定形だが、南東側は方形に近い形を呈する。規模は長軸約3.1m、短軸約2.4m、床面までの中央付近で約20cmを測る。

遺物は、弥生土器類が出土している。

出土遺物(第28図)

1・2とも弥生土器である。1は端部を丸く仕上げ、2は端部を肥厚させ、角張らせて仕上げる。



第28図 17号竪穴住居跡実測図(1/60)

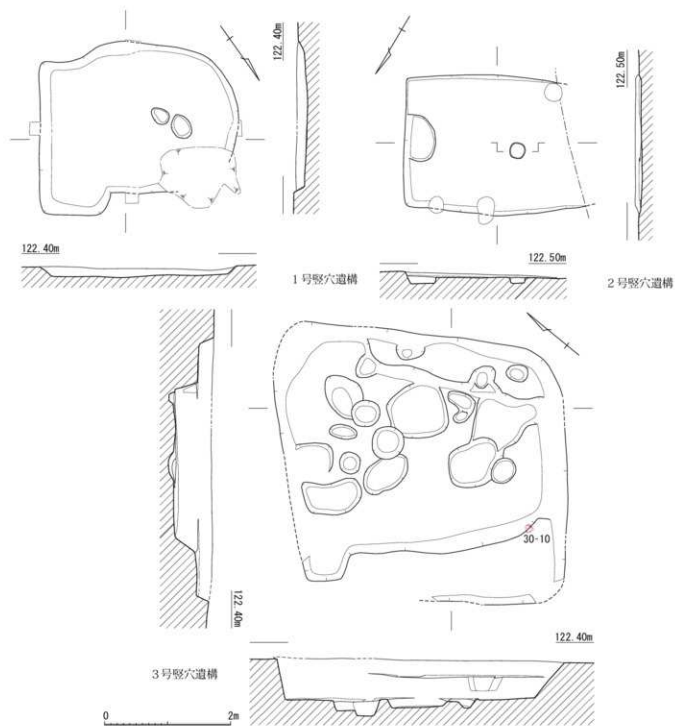
2号竪穴遺構(第29図)

6号竪穴住居跡の南東側で確認された。南西側は削平を受けているが、本来は調査区外へ広がっていたとみられ、平面形は方形を呈すると考えられる。床面にはビットや土坑状の落ち込みが見られるが、住居跡と判断するには材料に乏しいため、竪穴遺構とした。規模は長軸約2.6m+α、短軸約2.2m、床面までの深さは約10cmを図る。

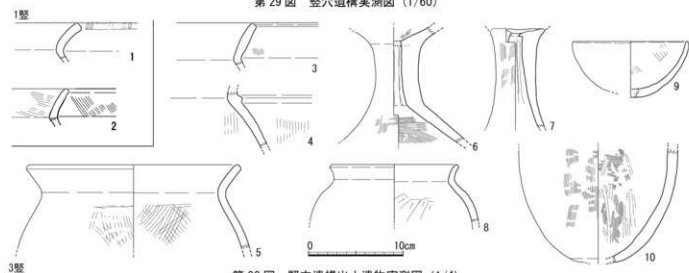
遺物は出土しなかった。

3号竪穴遺構(第29図)

2号竪穴住居跡の東側で確認され、この住居や8・10号土坑に切られる。平面形はやや歪な方形を呈し、内部には段落ちや多くのビットが掘り込まれているが、住居跡と判断できずに竪穴遺構とした。規模は長軸約4.5m、短軸約4.2m、床面までの深さは60～70cmを測る。



第29图 竖穴道構実測图 (1/60)



第30图 竖穴道構出土物実測图 (1/4)

遺物は弥生土器甕・壺・鉢・高坏が出土している。

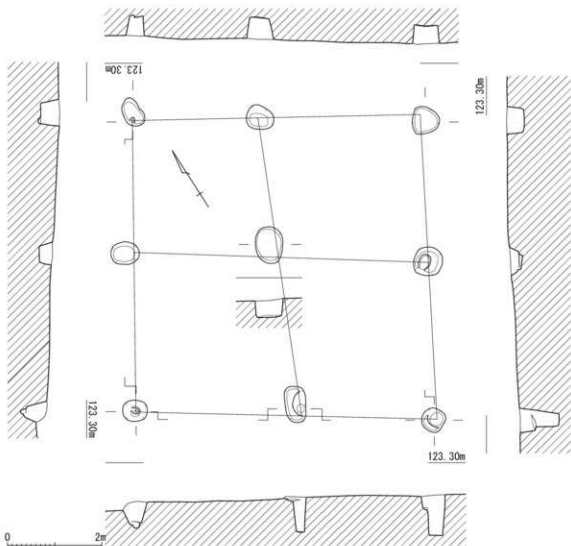
出土遺物 (第30図 図版21)

第30図3・5・8・10は弥生土器甕である。3は口縁端部を沈線状に窪ませる。8の頸部の屈曲は緩やかで端部を角張らせる。10は丸底で内面にはタテ方向のミガキが施される。4は弥生土器壺である。頸部に断面三角形の突帯を貼り付ける。6・7は弥生土器高坏の脚部である。ともに脚端部を欠損しているが、6が直線的で開きが小さいのに対し、7は中位付近で大きく開く。9は弥生土器鉢である。

3. 掘立柱建物 (第31図 図版11)

B7グリッドで確認され、主軸方向をN-31°-Eにとる2間×2間の平面方形の総柱建物で、31号土坑を切る。柱穴の深さは30～85cmで、柱穴間の心点距離で約2.6～3.5m、規模は同様に心点距離で東西方向約6.2～6.3m、南北方向約6.1～6.3mである。

遺物は出土しなかった。



第31図 掘立柱建物実測図 (1/80)

4. 土坑

1号土坑 (第32図 図版11)

調査区の南側、B6グリッドで確認された。平面形は南側がやや膨れる隅丸方形を呈し、底面はやや傾斜する。壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約2.0m、短軸1.2m、検出面からの深さは約25cmを測る。遺物は土師器甕が出土している。

出土遺物 (第35図)

第35図1は甕である。口縁端部は肥厚し、沈線状の窪みが見られる。

2号土坑 (第32図 図版11)

調査区東側、A8グリッドで確認された。平面形は不定形で、底面はやや傾斜する。北側にはビット状の落ち込みがあるが、土坑に伴うかは不明である。壁は北側が直立するのを除き、斜めに立ち上がる。規模は長軸約2.0m、短軸約1.5m、検出面からの深さは1段目が約50cm、ビット底面までは約80cmを測る。埋土は暗褐色を呈し、炭が混じる。遺物は弥生土器甕が出土した。

出土遺物 (第35図)

第35図2は弥生土器甕である。口縁端部をやや角張らせて仕上げる。

3号土坑 (第32図 図版12)

2号土坑の東側で確認された。平面形は楕円形を呈する。底面は平らで、壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸が約1.4m、短軸約0.6m、遺構面からの深さは約10cmを測る。埋土は暗黄褐色を呈する。遺物は出土しなかった。

4号土坑 (第32図)

1号竪穴住居跡の北側で確認された。平面形はやや歪な円形を呈し、底面はやや傾斜する。壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約3.2m、短軸約2.7m、検出面からの深さは約60cmを測る。遺物は、弥生土器壺・高環・器台が出土している。

出土遺物 (第35図 図版21)

第35図3・4は高環である。3は口縁部で端部はほぼ水平に外に開き、丸く仕上げる。4は脚部で直線的に外に開く。5は甕の頸部で、刻みを施した断面三角形の突帯を貼り付ける。5は器台の脚部である。

5号土坑 (第32図 図版12)

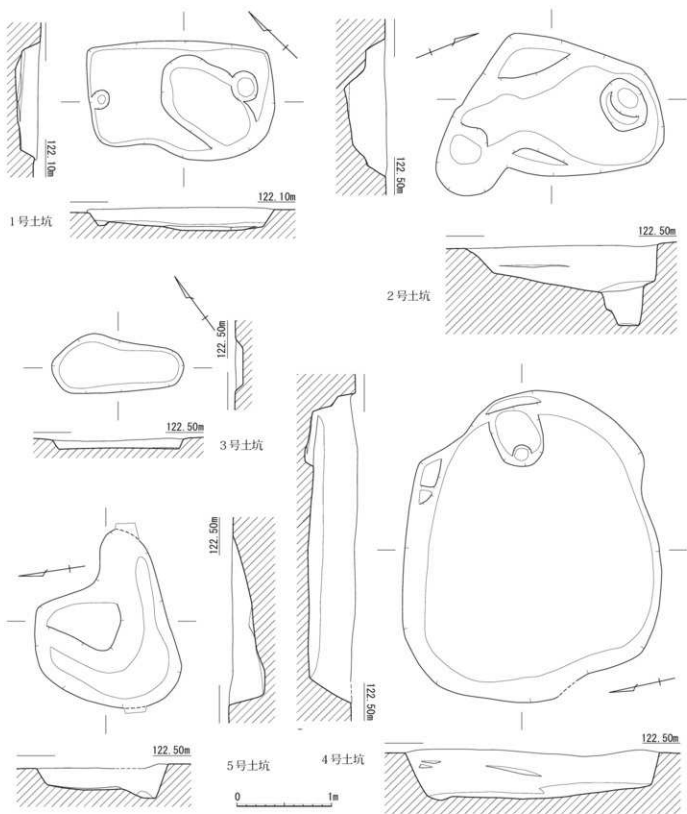
4号土坑の北東側で確認され、6号土坑を切る。平面形は不定形で底面はやや舟底状となり、南側は段落ちがみられる。壁の立ち上がりは緩やかである。規模は長軸約1.9m、短軸約1.4m、検出面からの深さは約40cmを測る。遺物は弥生土器壺・鉢が出土している。

出土遺物 (第35図)

第35図7は鉢の口縁部である。端部は尖り気味に仕上げる。8は甕の頸部である。刻みを施した断面三角形の突帯を貼り付ける。9は甕である。外面には横方向のミガキを施す。

6号土坑 (第33図)

5号土坑の西側で確認され、これに切られる。平面形は歪な円形を呈する。底面は比較的平坦で、南側に段落



第 32 図 土坑実測図 (1) (1/40)

ちが見られる。壁は比較的急角度で立ち上がる。規模は長軸約 1.6 m + α 、短軸約 1.8 m、検出面からの深さは最も深い部分で約 80 cm を測る。遺物は弥生土器甕・高環が出土した。

出土遺物 (第35図 図版21)

第35図10は甕である。頸部より下位は直立気味で殆んど張らない。11は高杯の口縁部である。端部は水平に開く。

7号土坑 (第33図)

15号竪穴住居跡の西側で確認され、これを切る。平面形はほぼ円形を呈する。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約1.0m、短軸約0.9m、検出面からの深さは約20cmを測る。遺物は弥生土器壺が出土している。

出土遺物 (第35図)

第35図12は壺の口縁部である。端部は角張らせて仕上げる。

8号土坑 (第33図 図版12)

3号竪穴遺構の北側で確認され、これを切る。平面形は不定形である。底面はほぼ平坦で、段落ちがみられる。規模は長軸約1.3m、短軸約0.9m、検出面からの深さは最も深い部分で約50cmを測る。遺物は弥生土器壺・甕が出土している。

出土遺物 (第35図 図版21)

第35図13・15は壺である。頸部の屈曲は緩く、胴部中位で最大径を図るが、この部位は直立気味である。15は断面台形の突帯を貼り付け、突帯には刻みが施される。14は甕の口縁部で、端部を肥厚させる。

9号土坑 (第33図 図版13)

9号竪穴住居跡の北側で確認され、23号土坑を切る。平面形はほぼ円形を呈する。床面は緩やかな段落ちがみられ、壁は急角度で立ち上がる。規模は長軸約1.5m、短軸約0.9m、検出面からの深さは約30cmを測る。遺物は弥生土器鉢が出土している。

出土遺物 (第35図)

第35図16・17は鉢である。ともに口縁端部は丸味を帯びる。

10号土坑 (第33図 図版13)

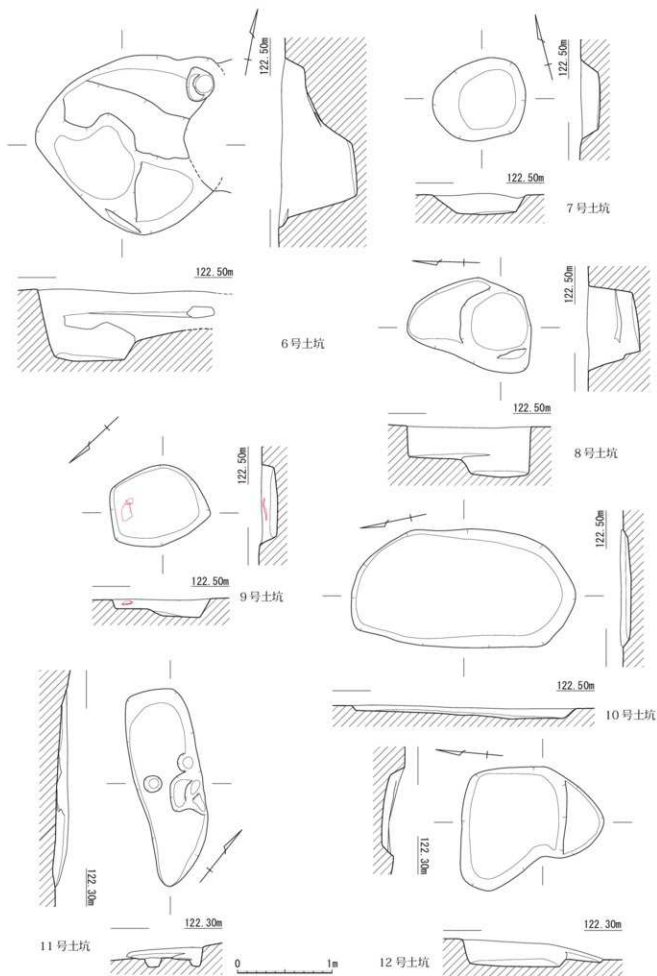
3号竪穴遺構の内側で確認され、これを切る。平面形は楕円形を呈し、底面はやや傾斜する。壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約2.4m、短軸約1.3m、検出面からの深さは約10cmを測る。遺物は弥生土器高杯が出土している。

出土遺物 (第35図)

第35図18は高杯で、杯部下位と頸部が残る。杯部は端部に向かって直線的に開くとみられる。

11号土坑 (第33図)

7号竪穴住居跡の西側で確認され、これを切る。平面形はやや細長い歪な楕円形を呈する。床面には数個のピットがあるが、土坑に伴うかどうかは不明である。底面は緩やかに傾斜し、北西及び南東の壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約2.1m、短軸約0.7m、検出面からの深さは約10cmを測る。遺物は弥生土器が出土しているが、実測可能な遺物はなかった。



第33图 土坑实测图(2)(1/40)

12号土坑 (第33図 図版13)

11号土坑の北西側で確認された。平面形は不定形で、床面には段落ちがみられ、ほぼ平坦である。規模は長軸約1.5m、短軸約1.0m、検出面からの深さは最も深い部分で約25cmを測る。埋土は暗茶褐色砂質土である。遺物は弥生土器が出土しているが、実測可能な遺物はなかった。

14号土坑 (第34図)

12号土坑の西側で確認された。平面形は楕円形を呈する。床面は西側にビット状の落ち込みがみられ、平坦ではない。規模は長軸約1.4m、短軸約0.5m、検出面からの深さは最も深い部分で約20cmを測る。埋土は上層が暗茶褐色、下層が暗灰褐色を呈する。遺物は弥生土器が出土している。

出土遺物 (第35図)

第35図19は甕の口縁部である。中位付近がやや膨らみをもつ。

15号土坑 (第34図)

14号土坑の東側に隣接して確認された。平面形は歪な楕円形を呈し、床面には緩やかな段落ちやビット状の落ち込みが見られる。壁は南東側を除き、緩やかに立ち上がる。規模は長軸約2.6m、短軸約1.0m、検出面からの深さは中央付近で約20cmを測る。埋土は灰茶褐色を呈し、炭や焼土を少量含む。遺物は弥生土器が出土している。

出土遺物 (第35図)

第35図20は甕の口縁部で、端部をやや肥厚させる。

16号土坑 (第34図 図版14)

4号竪穴住居跡の内側で確認され、4号竪穴住居跡を切る。平面形は歪な楕円形を呈し、床面にはビット状の落ち込みが見られる。壁はやや傾斜して立ち上がる。規模は長軸約1.2m、短軸約0.8m、検出面からの深さは最も深い部分で約25cmを測る。埋土は上層が暗茶褐色、下層が暗灰褐色を呈し、砂質である。遺物は弥生土器・甕が出土している。

出土遺物 (第35図)

第35図21は甕で、口縁端部を肥厚させる。22は甕か。

17号土坑 (第34図 図版14)

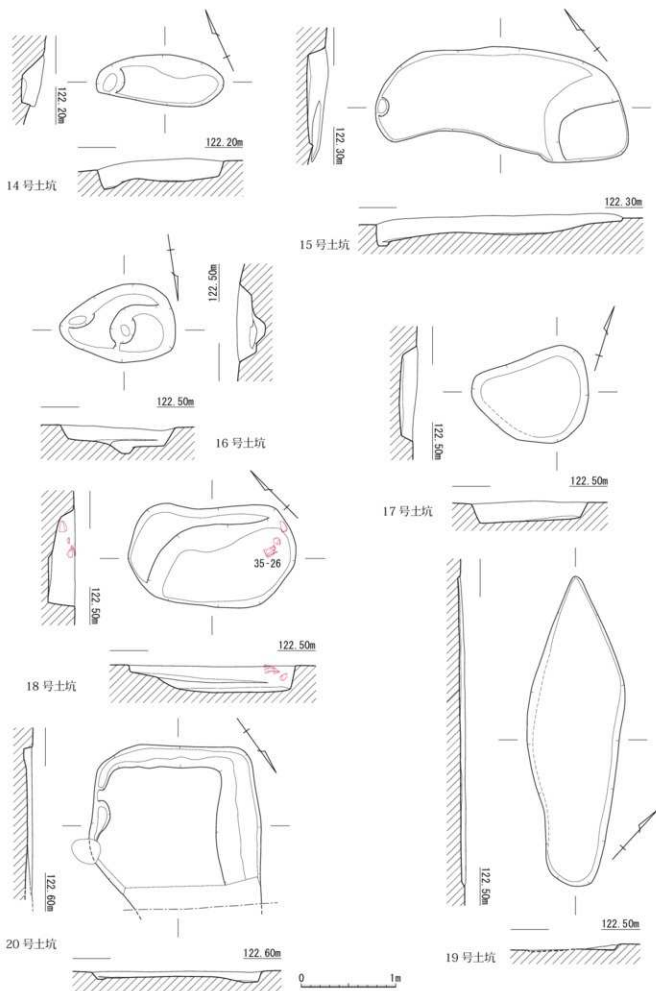
2号竪穴住居跡の内側で確認され、これを切る。平面形は隅丸の三角形に近い形を呈し、床面は平坦である。壁は急角度で立ち上がる。規模は長軸約1.2m、短軸約1.0m、検出面からの深さは約20cmを測る。埋土は暗茶褐色を呈し、焼土・炭が混じる。遺物は弥生土器が出土しているが、実測可能な遺物はなかった。

18号土坑 (第34図 図版14)

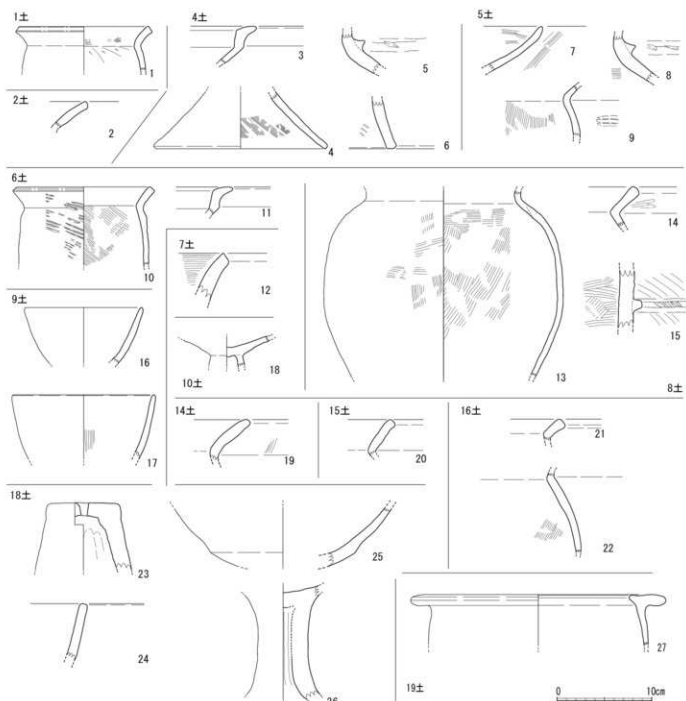
12号竪穴住居跡の北側で確認され、これを切る。平面形は楕円形を呈し、床面には段落ちが見られる。壁は急角度で立ち上がる。規模は長軸約1.8m、短軸約1.0m、床面までの深さは約30cmを測る。遺物は弥生土器・高坏・支脚が東側で床面から浮いた状態で出土した。

出土遺物 (第35図 図版22)

第35図23は支脚である。24は鉢か。口縁端部はやや丸味を持たせて仕上げる。25は高坏坏部、26は高坏脚で、



第34图 土坑实测图(3)(1/40)



第35図 土坑出土遺物実測図(1)(1/4)

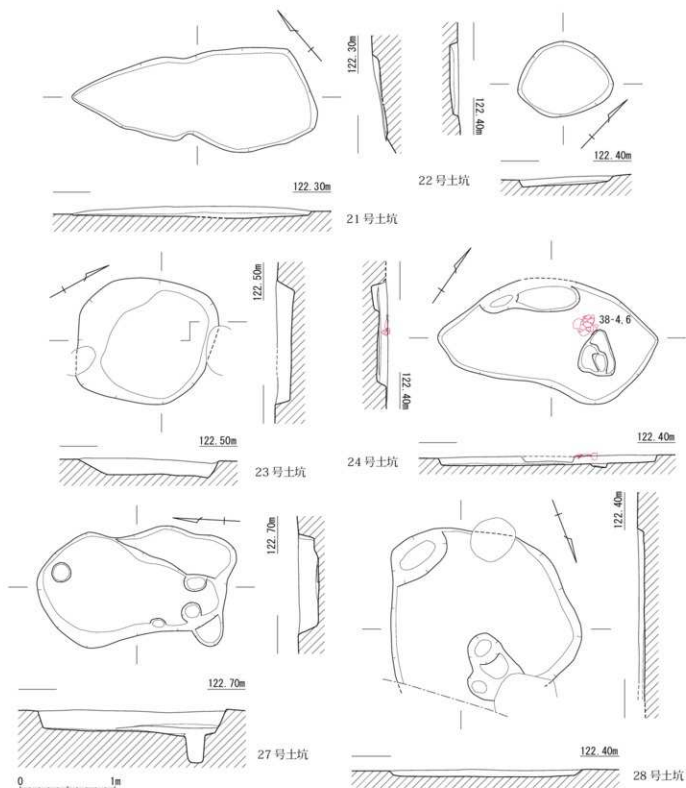
同一個体の可能性がある。

19号土坑(第34図 図版)

1号竪穴住居跡の西側で確認された。平面形は歪な細長い楕円形を呈する。床面は平坦で壁は急角度で立ち上がる。規模は長軸約3.3m、短軸約1.0m、検出面からの深さは約5cmを測る。遺物は弥生土器裏が出土している。

出土遺物(第35図)

第35図27は裏で逆「L」字形の口縁部である。内面はややつまみ出す。



第36図 土坑実測図(4)(1/40)

20号土坑 (第34図 図版15)

調査区北側の北東壁際で確認され、北側は調査区外へ広がる。平面形は方形に近い形を呈する。床面はほぼ平坦だが、壁際に溝状の掘り込みが見られる。壁は急角度で立ち上がる。規模は長軸約1.8m、短軸約1.5m+α、検出面からの深さは中央付近で約10cmを測る。遺物は弥生土器表が出土している。

出土遺物 (第38図 図版22)

第38図1～3は甕である。1は頸部の屈曲が緩く、口縁部は直線的に開く。これに対し、2は頸部内面の屈

曲は明瞭で、外反して開く口縁部を持つ。3は底部でレンズ状を呈する。

21号土坑 (第36図)

2号竪穴遺構の南側で確認された。平面形は19号土坑同様、歪な細長い楕円形を呈する。床面はほぼ平坦で、壁は急角度で立ち上がる。規模は長軸約2.6m、短軸約0.9m、検出面からの深さは約10cmを測る。遺物は弥生土器が出土しているが、実測可能な遺物はなかった。

22号土坑 (第36図 図版15)

2号竪穴住居跡の南東側で確認され、これを切る。平面形はやや歪な円形を呈し、床面はほぼ平坦である。壁は急角度で立ち上がる。規模は長軸約1.0m、短軸約0.8m、検出面からの深さは約10cmを測る。遺物は弥生土器が出土しているが、実測可能な遺物はなかった。

23号土坑 (第36図)

9号土坑の北側で確認され、これに切られる。平面形は歪な方形を呈し、床面はほぼ平坦である。壁は南西側を除き、急角度で立ち上がる。規模は長軸約1.4m、短軸約1.3m、検出面からの深さは約15cmを測る。

遺物は弥生土器片が出土しているが、実測可能な遺物はなかった。

24号土坑 (第36図 図版15)

13号土坑の北側で確認された。平面形は歪な楕円形を呈し、床面はほぼ平坦である。壁は垂直に近い角度で立ち上がる。規模は長軸約2.3m、短軸は北壁が削られているもの、約1.1mと推定され、検出面からの深さは約10cmを測る。遺物は弥生土器裏・高環が出土している。

出土遺物 (第38図 図版22)

第38図4は高環口縁部である。5・6は裏である。5は頸部下位の傾きから、胴部の張りは小さいとみられる。6は胴部中位で最大径を測り、レンズ状の底部を持つ。

27号土坑 (第36図 図版14)

1号竪穴住居跡の東側で確認された。平面形は不定形で、床面は平坦であるが、段落ちやピットが見られる。規模は長軸約2.0m、短軸約1.1m、検出面からの深さは中央付近で約20cm、最も深いピットで約50cmを測る。

遺物は弥生土器片が出土しているが、実測可能な遺物はなかった。

28号土坑 (第36図)

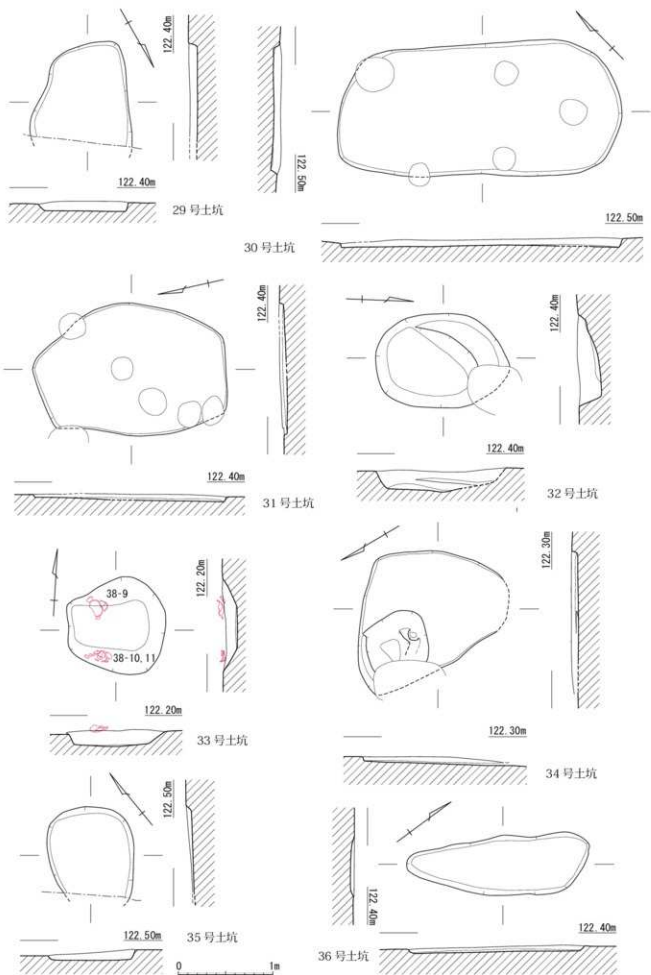
調査区中央の東側、C11付近で確認された。平面形は不定形で、北側は調査区外へ広がる。床面は平坦であるが、ピットが見られる。規模は調査区外へ広がる長軸が約 $1.8m + \alpha$ 、短軸が約2.0m、検出面からの深さは約5cmを測る。遺物は弥生土器高環が出土した。

出土遺物 (第38図 図版22)

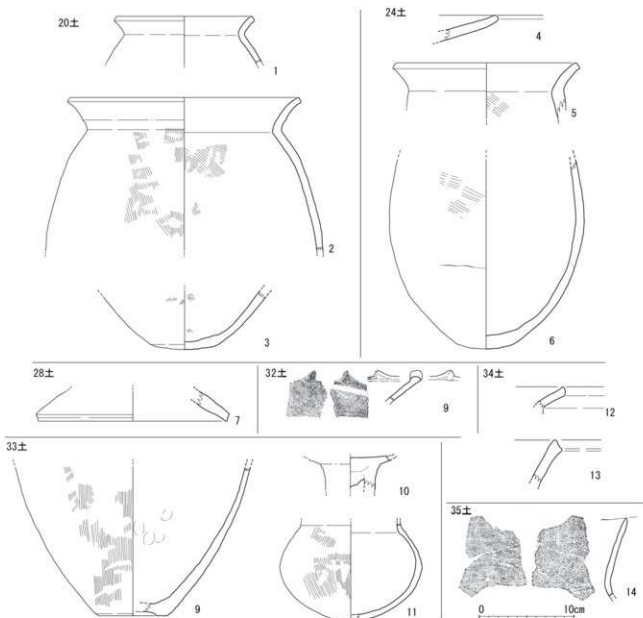
第38図7は高環脚部である。端部付近のみの残存であるが、その傾きから開きは大きいと思われる。

29号土坑 (第37図)

28号土坑の北西側で確認された。北側は調査区外へ広がり、平面形はやや歪な方形を呈するとみられる。床



第37图 土坑实测图(5)(1/40)



第 38 図 土坑出土遺物実測図 (2) (1/4)

面は平坦で、壁は急角度で立ち上がる。規模は長軸約 1.0 m + α 、短軸約 0.9 m、検出面からの深さは約 10 cm を測る。遺物は出土しなかった。

30 号土坑 (第 37 図)

1 号竪穴住居跡の南側、B 8 グリッド内で確認された。平面形は楕円形を呈し、床面は平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模は長軸約 3.0 m、短軸約 1.4 m、検出面からの深さは約 10 cm を測る。遺物は出土しなかった。

31 号土坑 (第 37 図)

30 号土坑の南西側に隣接して確認された。平面形は角張り気味の楕円形に近い形を呈し、床面は平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模は長軸約 2.0 m、短軸約 1.4 m、検出面からの深さは約 5 cm を測る。遺物は出土しなかった。

32号土坑 (第37図)

9号竪穴住居跡の内側で確認され、この住居を切る。平面形は楕円形を呈し、床面には段落ちが見られる。壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約1.4m、短軸約1.0m、検出面からの深さは最も深い中央付近で約20cmを測る。遺物は縄文土器浅鉢が出土している。

出土遺物

(第38図 図版22)

第38図8は浅鉢の口縁部である。端部にリボン状の突起が見られる。

33号土坑

(第37図 図版16)

5号竪穴住居跡の東隅角で確認され、この住居を切る。平面形は不定形で、床面はほぼ平坦である。壁はやや緩やかに立ち上がる。規模は長軸・短軸とも約1.0m、検出面までの深さは約15cmを測る。遺物は弥生土器甕・高環が出土している。

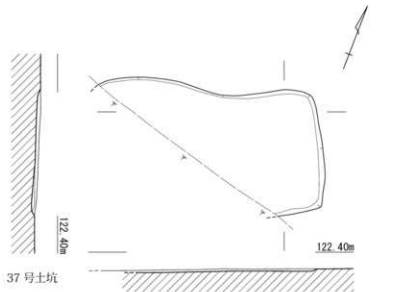
出土遺物

(第38図 図版22)

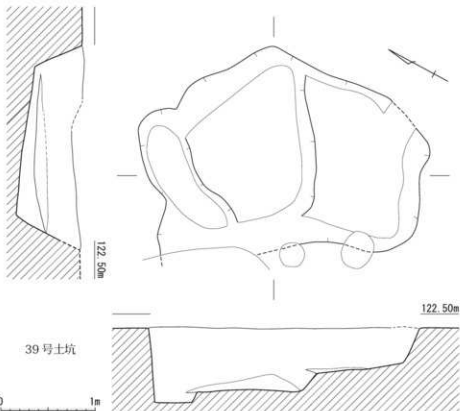
第38図9は甕である。底部は緑に平坦面を持ち、中心付近は上げ底となる。10は高環である。11は小型の甕と思われる。

34号土坑 (第37図)

1号土坑の北側で確認された。平面形は三角形に近い形を呈する。底面はほぼ平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。規模

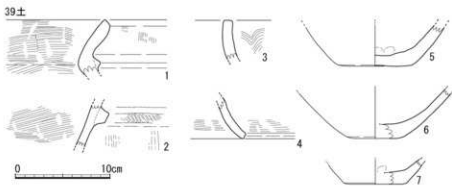


37号土坑

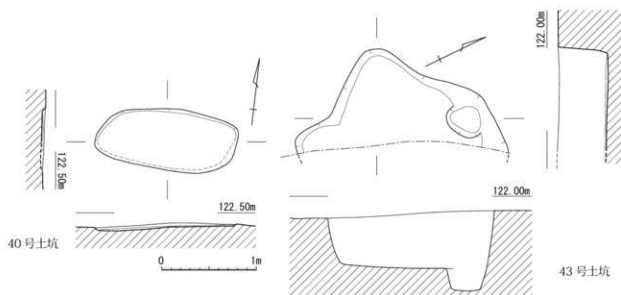


39号土坑

第39図 土坑実測図(6)(1/40)



第40図 土坑出土遺物実測図(3)(1/4)



第41図 土坑実測図(7)(1/40)

は長軸約1.5m+α、短軸約1.2m+α、検出面からの深さは約5cmを測る。遺物は弥生土器甕・壺が出土している。

出土遺物

(第38図 図版22)

第38図12は甕である。口縁端部をやや跳ね上げる。13は壺である。口縁端部をやや窪ませる。

35号土坑(第37図)

調査区北西側のF13・G13グリッドで確認された。南西側は削平を受けているが、平面形は楕円形に近い形を呈する。床面はほぼ平坦で、壁はやや傾斜して立ち上がる。規模は長軸約0.9m、短軸約0.9m、検出面からの深さは約10cmを図る。遺物は縄文土器深鉢が出土している。

出土遺物(第38図)

第38図14は深鉢である。口縁端部はやや波状を呈する。

36号土坑(第37図 図版16)

35号土坑の北側で確認された。平面形は細長く、歪な楕円形を呈し、床面は短軸がやや舟底状となる。壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約1.9m、短軸約0.6m、検出面からの深さは約5cmを測る。遺物は出土しなかった。

37号土坑(第39図)

36号土坑の西側で確認された。西側は削平を受けているが、平面形は長方形に近い形を呈するとみられる。床面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約1.9m+α、短軸約1.3m、床面からの深さは5cmほどである。遺物は出土しなかった。

39号土坑(第39図)

3号竪穴遺構の東側で確認され、4号土坑に切られる。平面形は不定形で、床面には数段の段落ちが見られる。床面は1段目がやや傾斜しているが、2、3段目は平坦である。壁は北側を除き、緩やかに立ち上がる。規模は

長軸約 2.9 m、短軸約 2.2 m、検出面からの深さは最も深い部分で約 80 cm を測る。遺物は弥生土器甕・壺・高環が出土している。

出土遺物 (第 40 図 図版 22)

第 40 図 1～3 は壺である。1 は短く開く口縁部に断面三角形の突帯を貼り付ける。2 は外面に波状文を施す。3 は断面台形の突帯を貼り付け、突帯には刻み目を施す。4 は高環の脚部か。5～7 は甕の底部である。いずれも平底である。

40 号土坑 (第 41 図)

調査区北側の E 12 グリッドで確認された。平面形は楕円形を呈し、床面は中央付近がやや高くなる。壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約 1.5 m、短軸約 0.65 m、検出面からの深さは約 5 cm を測る。

遺物は弥生土器が出土しているが、実測可能な遺物はなかった。

41 号土坑 (第 41 図)

調査区東壁際の B 6 グリッドで確認された。平面形は不定形で東側は調査区外へ広がる。北壁側にはピットがあるが、この土坑に伴うかどうかは不明である。床面はほぼ平坦で、壁はやや内湾しながら立ち上がる。規模は長軸約 1.8 m、短軸約 1.0 m + α 、検出面からの深さは中央付近で約 60 cm を測る。

遺物は出土しなかった。

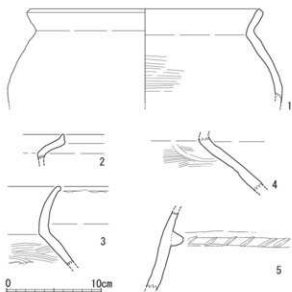
5. その他の遺物 (第 42・43 図 図版 22・23)

ここでは遺構に伴わなかった遺物について説明する。出土位置等については、観察表を参照されたい。

第 42 図 1～3 は弥生土器甕である。1 は端部をやや肥厚させ、角張らせて仕上げる。2 は跳ね上げ口縁、3 は口縁部の傾きがあまりなく、端部を厚めに丸く仕上げる。4・5 は弥生土器壺である。5 は断面半楕円形の突帯を貼り付ける。

第 43 図 1 は腰岳産黒曜石製の剥片礫である。先端が欠損する。2・3 はナイフ形石器である。いずれも黒曜石製で 2 は針尾産、3 は腰岳産と思われる。5 はスクレイパーと考えられる。腰岳産黒曜石製である。4、6～8 は剥片である。4・8 の石材は腰岳産黒曜石である。6・7 も黒曜石であるが、6 は腰岳産、7 は針尾産の可能性が高い。

9・11・13 は砥石である。いずれも一部が欠損するが、ほぼ完形に近い。石材はいずれも砂岩である。10 は片岩系の打製石斧である。刃部側の半分程度が残っているとみられる。12 は凝灰岩製の投弾である。



第 42 図 その他の土器実測図 (1/4)



第43图 出土石器实测图 (1:1/1, 2~8:2/3, 9~12:1/2)

IV まとめ

前章までに報告してきたように、今回の調査では竪穴住居跡・土坑などが確認された。これらの遺構の時期は弥生時代中期後半から古墳時代初頭までのものとみられるが、その多くは弥生時代後期後半を中心としている¹¹⁾。

まず、各遺構の大まかな時期をみていく。最も古い遺構は19号土坑で中期後半～末と考えられる。続く後期前半に6・8・13・15・17号竪穴住居跡がみられる。後期中頃～後半にかけて2・4・9号竪穴住居跡、後期後半～終末にかけて5・7・12号竪穴住居跡が作られ、最後に1号竪穴住居跡が古墳時代初頭にかかるとみられる。16号竪穴住居跡については、遺物からも切り合い関係からもその時期比定が困難である。

また、土坑に関しては8・20号が後期中頃、9・24号が後期後半、4～6・16・33号が後期後半～終末、さらに10・18・28号が後期終末にあたとみられる。その他の土坑に関しては、遺物が出土しなかったり、遺物が出土しても時期判断が難しくかったりするものもあり、切り合い関係から大体の時期を指摘するのに留まるものもある。

以上述べてきた時期変遷をまとめると第1表ようになる。

この時期比定から、切り合い関係を考慮すると、後期において同時期に存在する住居は3軒前後とみられる。対岸の金田遺跡では5軒前後であったことから、さほど変わらない規模であったと考えられる¹²⁾。

次に住居の規模についてみる。後期前半の住居は6号、12号竪穴住居跡がそれぞれ、一辺約4m、2.9m・3.4m、15号竪穴住居跡が約3mの規模である。これが中頃になると4号竪穴住居跡が5.9×6.1mと規模が大きくなり、5号、7号竪穴住居跡はともに4mを超える。さらに後半、終末から古墳時代初頭にかけて、長方形を呈する1号、12号竪穴住居跡は、長辺がそれぞれ7m、5m+αとさらに大型化していく。こうした住居の大型化は市内におけるこれまでの調査でも、同じく後期前半から中頃にかけてみられ、今回の調査でも改めて同様の傾向があることが確認できた¹³⁾。

第1表 検出遺構時期変遷表

遺構	弥 生					古墳 前期 初頭
	中 期 後半～末	後 期				
		前半	中頃	後半	終末	
19土	●					
6,13,15住		●				
8,17住		○				
39土		○	○			
8,20土			●			
2,4住			●	●		
9住			○	○		
3竪,9,24土				●		
4～6土				●	○	
14住		○	○	●	●	
16,33土				○	●	
5,7,12住,10,18,28土					●	
1住						●

●:最も多く出土している遺物の中心となる時期。

○:●以外でみられる遺物の時期、もしくは切り合い関係のみで判断するなど時期決定の根拠に乏しい遺構。

次に今回確認された住居のうち、14号竪穴住居跡についてみていく。この住居はやや乱れた平面形ではあるものの、床面の中央に掘り込まれた土坑を中心にして、円形に展開する8本の柱穴が確認されており、さらに数箇所の張り出しを持つ円形住居と考えられる。

出土遺物については、今回調査した遺構の中ではその数量が群を抜いて多く、時期は後期後半～終末までを中心に後期前半以降のものがみられ、他の遺構とほぼ同時期である。しかし、一般的に円形住居は後期初頭で作られなくなることから、この住居が後期終末まで継続していたとは考えにくい。そこで、市内における円形住居の時期をみると、既報告分で確認できるのは、11遺跡で70軒ほどある。その中で詳細がわかるものを時期順に遺跡名と確認軒数を括弧内に列挙する¹⁰⁾。

前期後半～末：小迫辻原(2)

前期末～中期初頭：小迫辻原(7)、後迫(5)、吹上(1)

中期前半：佐寺原(4)、吹上(2)、会所宮(1)

中期中頃：佐寺原(1)、金田(2)、宇土(1)

中期後半：後迫(4)、佐寺原(4)、金田(2)、宇土(7)

中期後半～後期初頭：後迫(3)、金田(7)、高野(5)、大肥(4)、祇園原(6)、宇土(2)

市内での円形住居は前期後半からみられるようになり、中期中頃までは、数遺跡で確認される程度だが、中期後半以降になると、それまで確認されていた遺跡に加え、高野遺跡、大肥遺跡等確認される遺跡やその軒数も一気に増加し、市内でもその分布域が広がったことが推測される。しかし、この後期初頭を以って円形住居は作られなくなり、方形住居にとって代わる。

このように市内の事例から円形住居は最も新しい例でも後期初頭とみられ、今回確認された14号竪穴住居跡が後期終末まで利用されていた可能性は低いと考えられる。そこで、一つの考え方として、後期初頭頃まで使用されていた住居がその廃絶後、埋没の過程で土器等の廃棄の場となった可能性がある。ただ、床面近くから出土している土器も多くあることから、その廃棄の開始時期や住居廃絶時の検討が必要であったと考えるが、結果的には担当者が発掘現場での遺物の出土状況の詳細な確認などを怠ったため、その検討ができなかったことをお詫びしたい。

続いて、縄文土器についてみてみる。今回の調査で出土した縄文土器は15点ほどであるが、このうち、12号竪穴住居跡から出土した鉢形土器は、その口縁部形態(第19図4)や上げ底の底部形態(同図7～13)から後期後葉に属するとみられる。また、6号竪穴住居跡(第13図3・4)、32・35号土坑出土の鉢形土器(第38図9・14)は、晩期前葉のものと考えられる。なお、今回出土したこれらの縄文土器は流れ込みによる可能性が高く、遺構に伴う可能性は低い。ただ、求来里川流域においては、町ノ坪遺跡で縄文時代後期の遺物包含層、金田遺跡では後期の土器の出土が見られ、また名里遺跡においては前期、後期の遺物包含層や早、中、晩期の遺物が確認されている¹¹⁾。こうしたことから、縄文時代の全時期を通して、求来里川流域を生活域として利用していたことが判明した。

求来里川流域における集落は、金田遺跡で弥生時代中期中頃に確認されて以降、後期前半には小西遺跡でも比較的多まった数の住居がみられるようになる。この2つの集落は、求来里川を挟んで後期終末まで継続するが、これ以降、金田遺跡では古墳時代後期まで断続的に集落がみられるのに対し、小西遺跡では古墳時代初頭を以って、集落は見られなくなる。これまでの調査で古墳時代以降は求来里川の上流域に集落が拡大していくことが確認されている¹²⁾。その時期、小西遺跡付近では、どのような土地利用が行われていたのか、興味深い問題である。

註

- (1) 弥生土器の編年は坂本氏(1999)、柳田氏(柳田1987)、吉田氏(吉田2001)、平尾氏(2001)の編年などを参考にした。
- (2) 若杉竜太『求来里の遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第89集 日田市教育委員会 2009
- (3) 若杉竜太『本村遺跡3次』日田市埋蔵文化財調査報告書第51集 日田市教育委員会 2004
- (4) 若杉竜太『高野遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第65集 日田市教育委員会 2006
- (4) 数回の建て替えが考えられるものはそれぞれを1軒とした。軒数は、調査範囲内の確認軒数なので、直接的には参考にはならないが、目安として挙げた。
- (5) 今田秀樹『町ノ坪遺跡D区』『平成17年度(2005年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2007
今田秀樹『名里遺跡』『平成19年度(2007年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2008
及び註(2)文献
また、名里遺跡では市内で2例目となるトロトロ石器が出土している。
- (6) 渡邊隆行『求来里の遺跡Ⅰ』日田市埋蔵文化財調査報告書第88集 日田市教育委員会 2009
若杉竜太『求来里平島遺跡』『平成17年度(2005年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2007
及び註(5)文献

(参考文献)

- 後藤一重編『香々地の遺跡Ⅱ』香々地文化財調査報告書第2集 大分県香々地町教育委員会 1995
渋谷忠幸ほか編『宇土遺跡発掘調査報告書』大分県天瀬町教育委員会 1986
坂本嘉弘『玖珠盆地とその周辺の弥生時代から古墳時代の土器編年』同編『ヶ台遺跡』玖珠町文化財調査報告書第9集 玖珠町教育委員会 1999
下村晋編『吹上Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第52集 日田市教育委員会 200
高橋徹・後藤一重編『菅生台地と周辺の遺跡Ⅺ 下菅生B遺跡 上菅生B遺跡』竹田市教育委員会 1986
田中裕介編『小迫上原遺跡Ⅰ』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書10 大分県教育委員会 1999
土居和幸ほか編『会所宮遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第11集 日田市教育委員会 1996
友岡信彦・松本康弘編『佐寺原遺跡 尾書遺跡群 有田塚々原古墳群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(9) 大分県教育委員会 1998
友岡信彦『後迫遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(18) 大分県教育委員会 2001
原田真一ほか編『一級河川求来里川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第31集 大分県教育庁埋蔵文化財センター 2008
平尾和久『浮羽郡内における弥生時代後期の土器について』吉田真明編『仁右衛門遺跡Ⅱ』下巻 浮羽ハイパス関係埋蔵文化財調査報告書第14集 福岡県教育委員会 2001
柳田康雄『2. 高三瀨式と西新式土器』佐原真編『弥生時代の研究』4 弥生土器Ⅱ 植山潤 1987
行時桂子『指原遺跡Ⅱ(弥生・古墳時代遺物編)』日田市埋蔵文化財調査報告書第81集 日田市教育委員会 2007
行時桂子『指原遺跡Ⅱ(弥生・古墳時代遺物編)』日田市埋蔵文化財調査報告書第87集 日田市教育委員会 2008
行時志郎『徳瀬遺跡B区』『平成5年度 日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 1995
吉田真明『仁右衛門遺跡出土の弥生時代中期土器について』同編『仁右衛門遺跡Ⅱ』下巻 浮羽ハイパス関係埋蔵文化財調査報告書第14集 福岡県教育委員会 2001
若杉竜太編『後迫遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第35集 日田市教育委員会 2002
若杉竜太・比嘉えりか『佐寺原遺跡2次、3次調査』『平成20年度(2008年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会 2009
渡邊隆行『大野遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第66集 日田市教育委員会 2006

第3表 出土土器観察表(2)

調査番号	出土層位	器種	形状	口径(1)口径(2)口径(3)口径(4)				高さ		底径		底厚		重量		土質		色		備考
				口径(1)	口径(2)	口径(3)	口径(4)	高さ	底径	底厚	重量	土質	色	土質	色					
第1490	125	縄文土器	鉢					16.0		ナブ			0.0	0.0	0.0	0.0	黒	黄褐色	灰青褐色	
第1497	125	縄文土器	鉢					16.0	11.0	ナブ			0.0	0.0	0.0	0.0	黒	褐色	紅い黄褐色	
第1498	125	縄文土器	鉢					14.0	11.0	磨製(1)土質	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	黄褐色	灰褐色	
第1499	125	縄文土器	鉢					4.4	12.0	ナブ			0.0	0.0	0.0	0.0	黒	黄褐色	褐色	
第1501	125	縄文土器	鉢					16.40	11.0	ナブ	磨製(1)土質		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	黄褐色	褐色	
第1501	125	縄文土器	鉢					8.8	12.0	ナブ			0.0	0.0	0.0	0.0	黒	黄褐色	灰青褐色	
第1502	125	縄文土器	鉢					16.0	14.1	ナブ			0.0	0.0	0.0	0.0	黒	黄褐色	褐色	
第1503	125	縄文土器	?					16.0	16.0	ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	褐色	灰青褐色	
第1504	145	弥生土器	壺	23.0				17.0		ナブ			0.0	0.0	0.0	0.0	黒	黄褐色	灰青褐色	
第1502	145	弥生土器	鉢					10.0	12.0	ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	紅い黄褐色	紅い黄褐色	
第1501	145	弥生土器	鉢	23.0	26.0	17.0		16.0		ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	黄褐色	灰青褐色	
第1502	145	弥生土器	壺	17.4	16.4	6.6	20.1			ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	黄褐色	紅い黄褐色	大木村
第1503	145	弥生土器	壺	11.0	14.8	4.4	13.0			ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	紅い黄褐色	紅い黄褐色	
第1504	145	弥生土器	壺	18.0	18.0		18.0			ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	黄褐色	灰青褐色	大木村
第1505	145	弥生土器	壺	26.0	26.0		26.0			ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	黄褐色	黄褐色	
第1506	145	弥生土器	壺	23.4	26.7		26.7			ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	紅い黄褐色	黄褐色	大木村
第1507	145	弥生土器	壺	21.0	22.0		22.0			ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	紅い黄褐色	紅い黄褐色	大木村
第1508	145	弥生土器	壺					16.0		ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	黄褐色	黄褐色	
第1509	145	弥生土器	壺	18.0				11.0		ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	黄褐色	褐色	
第1510	145	弥生土器	壺	24.8	27.1		26.6			ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	黄褐色	褐色	大木村、高森
第1511	145	弥生土器	壺					26.0		ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	紅い黄褐色	黄褐色	
第1512	145	弥生土器	壺					18.0		ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	紅い黄褐色	紅い黄褐色	高森
第1513	145	弥生土器	壺					7.6	10.0	ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	黄褐色	褐色	磨製(1)土質(2)土質(3)
第1514	145	弥生土器	壺	21.0	20.0		20.0			ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	黄褐色	紅い黄褐色	145層
第1514	145	弥生土器	壺					16.0	13.0	ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	黄褐色	灰青褐色	大木村
第1515	145	弥生土器	壺					16.0	16.0	ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	黄褐色	灰青褐色	
第1516	145	弥生土器	壺					7.4	16.4	ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	黄褐色	灰青褐色	
第1517	145	弥生土器	壺					16.0	12.0	ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	黄褐色	黄褐色	
第1518	145	弥生土器	壺					16.0	12.0	ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	黄褐色	褐色	
第1519	145	弥生土器	壺					16.0	16.0	ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	紅い黄褐色	灰青褐色	
第1520	145	弥生土器	壺					8.8	16.0	ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	紅い黄褐色	黄褐色	
第1521	145	弥生土器	壺					16.0	13.0	ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	褐色	紅い黄褐色	大木村
第1522	145	弥生土器	壺					17.4	11.4	磨製(1)土質	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	黄褐色	黄褐色	
第1523	145	弥生土器	壺					6.7	13.0	ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	黄褐色	黄褐色	
第1524	145	弥生土器	壺	14.8	18.1	7.6	17.6			ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	黄褐色	灰青褐色	へろ磨き、高森
第1525	145	弥生土器	壺	16.0	12.0	14.0	16.2			ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	黄褐色	灰青褐色	高森(2)土質
第1526	145	弥生土器	壺	16.0	16.0	6.2	26.0			ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	黄褐色	褐色	高森
第1527	145	弥生土器	壺	17.4	26.0	6.6	16.2			ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	黄褐色	黄褐色	高森、高森(2)土質
第1528	145	弥生土器	壺	18.0	18.0		18.0			ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	黄褐色	灰褐色	
第1529	145	弥生土器	壺					16.0		ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	黄褐色	黄褐色	
第1530	145	弥生土器	壺					16.0		ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	黄褐色	褐色	
第1531	145	弥生土器	壺					11.0		ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	紅い黄褐色	黄褐色	
第1532	145	弥生土器	壺	21.4				16.4		ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	紅い黄褐色	褐色	高森
第1533	145	弥生土器	壺	21.4				16.4		ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	黄褐色	褐色	高森
第1534	145	弥生土器	壺	27.4				16.0		ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	黄褐色	褐色	145層(1)土質
第1535	145	弥生土器	壺	13.0				16.0		ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	紅い黄褐色	黄褐色	
第1536	145	弥生土器	壺	13.0				16.0		ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	紅い黄褐色	黄褐色	
第1537	145	弥生土器	壺					13.0		ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	紅い黄褐色	黄褐色	145層(1)土質
第1538	145	弥生土器	壺					13.0		ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	紅い黄褐色	黄褐色	
第1539	145	弥生土器	壺					13.0		ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	紅い黄褐色	黄褐色	
第1540	145	弥生土器	壺					13.0		ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	紅い黄褐色	黄褐色	
第1541	145	弥生土器	壺	21.4				16.4		ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	紅い黄褐色	褐色	高森
第1542	145	弥生土器	壺	18.0				16.0		ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	褐色	褐色	高森
第1543	145	弥生土器	壺	28.4				12.0		ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	黄褐色	黄褐色	
第1544	145	弥生土器	壺					16.0		ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	黄褐色	黄褐色	145層(1)土質、145層(2)土質
第1545	145	弥生土器	壺	13.0				16.0		ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	紅い黄褐色	黄褐色	
第1546	145	弥生土器	壺	13.0				16.0		ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	紅い黄褐色	黄褐色	
第1547	145	弥生土器	壺					13.0		ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	紅い黄褐色	黄褐色	
第1548	145	弥生土器	壺					13.0		ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	紅い黄褐色	黄褐色	
第1549	145	弥生土器	壺					13.0		ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	紅い黄褐色	黄褐色	
第1550	145	弥生土器	壺					13.0		ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	紅い黄褐色	黄褐色	
第1551	145	弥生土器	壺					13.0		ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	紅い黄褐色	黄褐色	
第1552	145	弥生土器	壺					13.0		ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	紅い黄褐色	黄褐色	
第1553	145	弥生土器	壺					13.0		ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	紅い黄褐色	黄褐色	
第1554	145	弥生土器	壺					13.0		ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	紅い黄褐色	黄褐色	
第1555	145	弥生土器	壺					13.0		ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	紅い黄褐色	黄褐色	
第1556	145	弥生土器	壺					13.0		ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	紅い黄褐色	黄褐色	
第1557	145	弥生土器	壺					13.0		ナブ	ナブ		0.0	0.0	0.0	0.0	黒	紅い黄褐色	黄褐色	

第5表 出土土器観察表(4)

調査 番号	写真 図版	出土 位置	器 種	器 名	器 種				材 質				色 調		備 考			
					口径	胴径	底径	高	丸	平	内	外	表	裏		丸	内	
第43図1	23	81	弥生土器	鉢				36.0		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図2	23	81	弥生土器	高脚				36.0		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図3	23	81	弥生土器	高脚				114.0		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図7	23	81	弥生土器	甕	DA.0			14.0		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	灰褐色
第43図8	23	81	弥生土器	甕	DA.0			13.0		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	褐色	褐色
第43図9	23	81	弥生土器	甕	DA.0			138.0		ハタ・ナデ	ハタ・ナデ	0	0	0	0	黒	江口の黄褐色	江口の黄褐色 内面ニス付
第43図10	23	81	弥生土器	甕				36.0		ハタ・ナデ	ハタ・ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図14	23	81	弥生土器	甕				13.0		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	褐色	赤褐色
第43図15	23	81	弥生土器	甕				13.0		ナデ	ハタ・ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	赤褐色
第43図16	23	81	弥生土器	甕				36.5		ハタ・ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	褐色	黄褐色
第43図7	23	81	弥生土器	高脚				114.0		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図11	23	81	縄文土器	高脚				13.0		平脚盤	平脚盤	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図12	23	81	弥生土器	甕				17.0		ハタ・ナデ	ナデ・黒サヤキ	0	0	0	0	黒	江口の黄褐色	黄褐色
第43図13	23	81	弥生土器	高脚				13.0		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	江口の黄褐色	江口の黄褐色
第43図11	23	81	弥生土器	甕				14.5		ハタ・ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図12	23	81	弥生土器	甕				0.40		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図13	23	81	弥生土器	甕				0.40		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図14	23	81	縄文土器	高脚				0.30		平脚盤	平脚盤	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図11	23	81	弥生土器	甕				0.40		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図12	23	81	弥生土器	甕				0.40		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図13	23	81	弥生土器	甕				0.40		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図14	23	81	縄文土器	高脚				0.30		平脚盤	平脚盤	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図11	23	81	弥生土器	甕				0.40		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図12	23	81	弥生土器	甕				0.40		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図13	23	81	弥生土器	甕				0.40		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図14	23	81	弥生土器	甕				0.40		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図15	23	81	弥生土器	甕				0.40		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図16	23	81	弥生土器	甕				0.40		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図17	23	81	弥生土器	甕				0.40		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図18	23	81	弥生土器	甕				0.40		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図19	23	81	弥生土器	甕				0.40		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図20	23	81	弥生土器	甕				0.40		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図21	23	81	弥生土器	甕				0.40		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図22	23	81	弥生土器	甕				0.40		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図23	23	81	弥生土器	甕				0.40		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図24	23	81	弥生土器	甕				0.40		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図25	23	81	弥生土器	甕				0.40		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図26	23	81	弥生土器	甕				0.40		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図27	23	81	弥生土器	甕				0.40		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図28	23	81	弥生土器	甕				0.40		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図29	23	81	弥生土器	甕				0.40		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図30	23	81	弥生土器	甕				0.40		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図31	23	81	弥生土器	甕				0.40		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図32	23	81	弥生土器	甕				0.40		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色
第43図33	23	81	弥生土器	甕				0.40		ナデ	ナデ	0	0	0	0	黒	黄褐色	黄褐色

第6表 出土石器観察表

押図 番号	写真 図版	出土位置等	器 種	石 材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重さ (g)	備 考
第43図1	23	C11	剥片	黒曜石	(2.30)	1.80	0.40	1.03	腰岳産
第43図2	23	I2住	ナイフ形石器	黒曜石	2.20	1.00	0.50	0.87	針尾産?
第43図3	23	13住	ナイフ形石器	黒曜石	2.55	1.40	0.80	2.13	腰岳産?小国産?
第43図4	23	14住	剥片	黒曜石	2.50	2.50	0.60	4.22	腰岳産
第43図5	23	B7	スクレイパー	黒曜石	2.70	1.60	0.65	2.12	腰岳産
第43図6	23	4住	剥片	黒曜石	3.00	2.00	0.90	2.67	腰岳産?
第43図7	23	一括	剥片	黒曜石	3.40	1.90	8.00	4.38	針尾産?
第43図8	23	1住	剥片	黒曜石	4.35	1.95	9.50	5.75	腰岳産
第43図9	23	7住	砥石	砂岩	11.70	7.00	3.10	231.60	
第43図10	23	14住	打製石斧	片岩系	6.20	5.10	0.90	26.04	
第43図11	23	39土坑	砥石	砂岩	5.45	2.70	1.30	22.89	
第43図12	23	14住	投弾	凝灰岩	3.50	2.50	2.20	25.85	
第43図13	23	7土坑	砥石	砂岩	14.00	7.40	4.00	370.50	



調査区遠景（西から）



調査区全景（南から）



1号竪穴住居跡発掘状況（南から）



1号竪穴住居跡遺物出土状況



1号竪穴住居跡遺物出土状況

2号竪穴住居跡発掘状況（北東から）



4号竪穴住居跡発掘状況（北西から）



4号竪穴住居跡遺物出土状況





5号竪穴住居跡発掘状況（南西から）



5号竪穴住居跡遺物出土状況



5号竪穴住居跡遺物出土状況

6号竪穴住居跡発掘状況（南西から）



6号竪穴住居跡遺物出土状況



6号竪穴住居跡遺物出土状況





7号竪穴住居跡発掘状況（北西から）



7号竪穴住居跡屋内土坑遺物出土状況

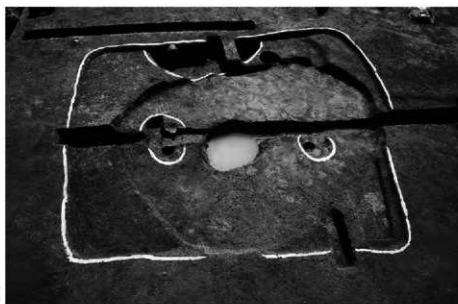


12号竪穴住居跡発掘状況（西から）

12号竪穴住居跡遺物出土状況



13号竪穴住居跡発掘状況（北西から）



13号竪穴住居跡遺物出土状況





14号竪穴住居跡発掘状況（北東から）



14号竪穴住居跡遺物出土状況



14号竪穴住居跡遺物出土状況

14号竪穴住居跡遺物出土状況



14号竪穴住居跡遺物出土状況



15号竪穴住居跡発掘状況（南西から）





16号竪穴住居跡発掘状況（西から）



17号竪穴住居跡発掘状況（西から）



1号竪穴遺構発掘状況（南東から）

掘立柱建物発掘状況（南東から）



1号土坑発掘状況（北東から）



2号土坑発掘状況（東から）





3号土坑発掘状況（北東から）



5号土坑発掘状況（南から）



8号土坑発掘状況（東から）

9号土坑発掘状況（北西から）



10号土坑発掘状況（西から）



12号土坑発掘状況（西から）





16号土坑発掘状況（南から）



17号土坑発掘状況（北西から）



18号土坑発掘状況（北東から）

20号土坑発掘状況（南から）



22号土坑発掘状況（北西から）



24号土坑発掘状況（北西から）





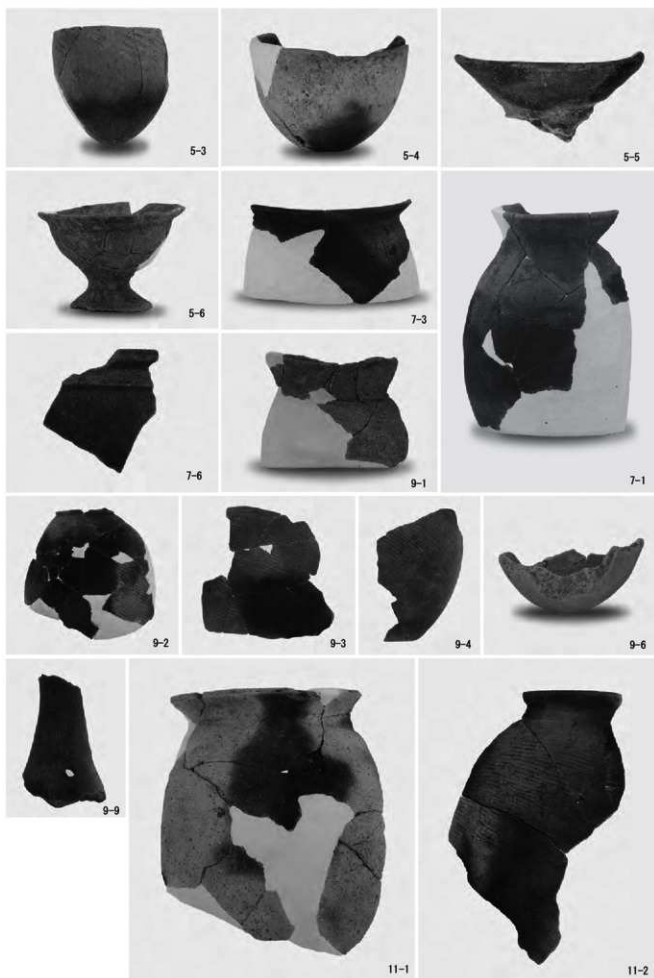
27号土坑発掘状況（東から）

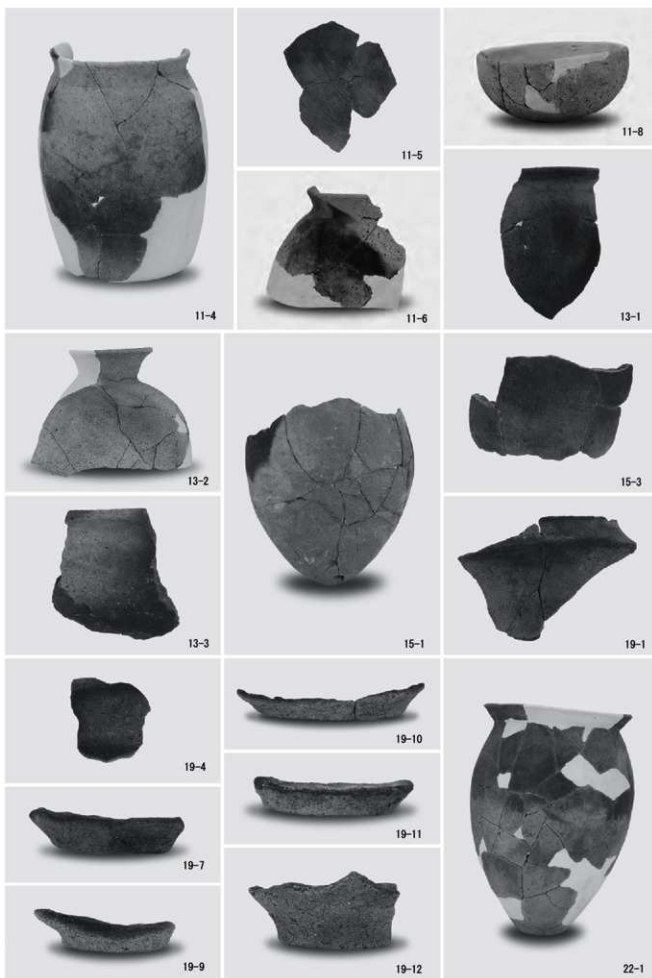


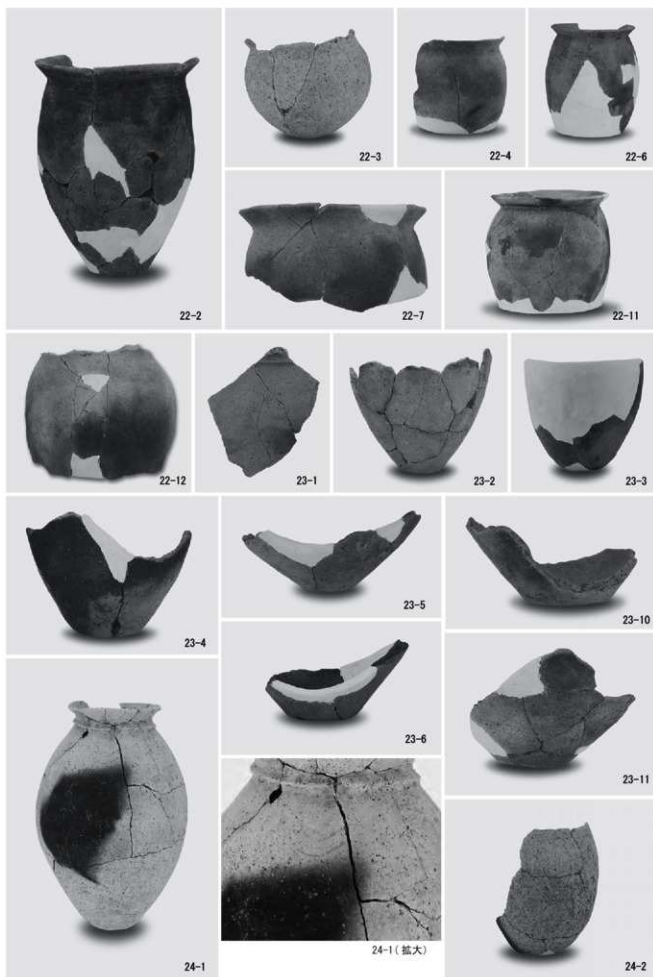
33号土坑発掘状況（南から）

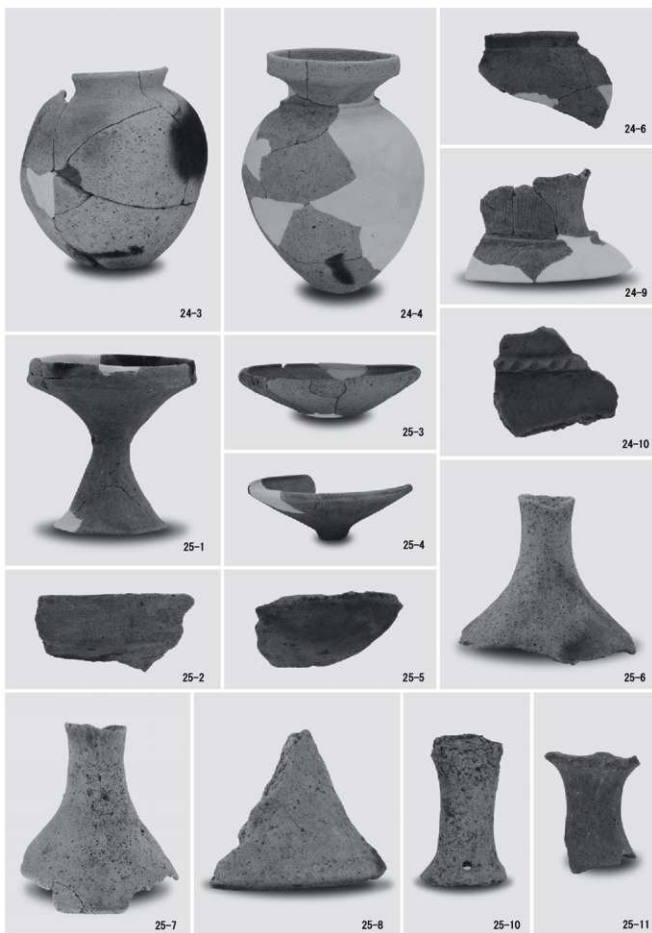


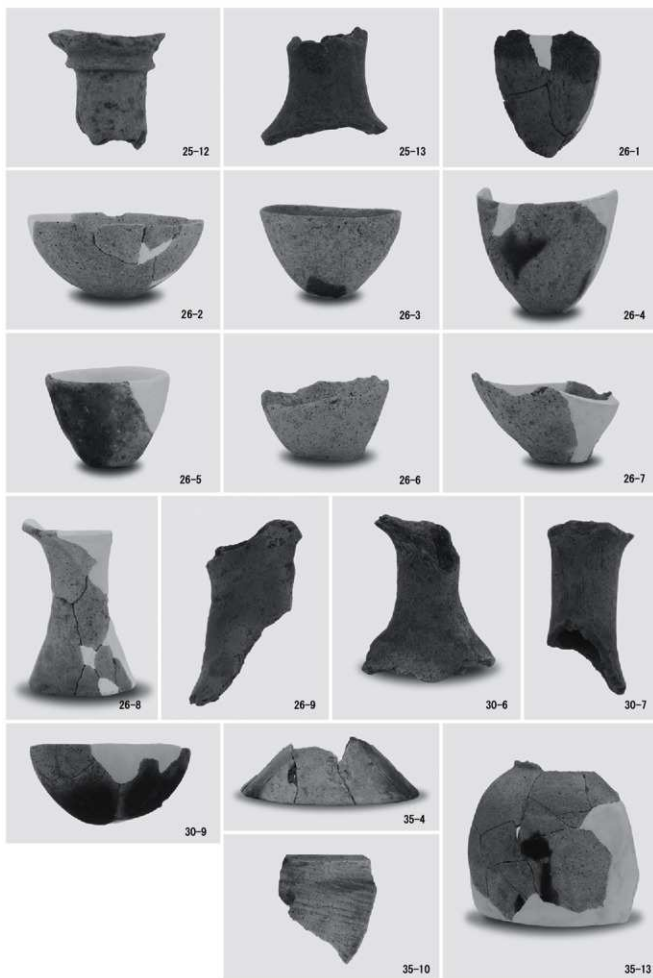
36号土坑発掘状況（北西から）

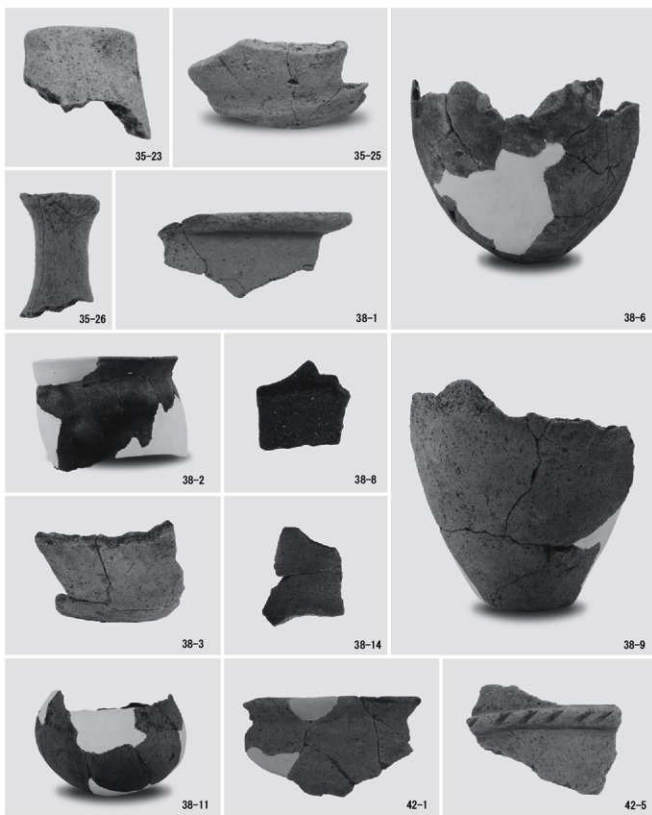


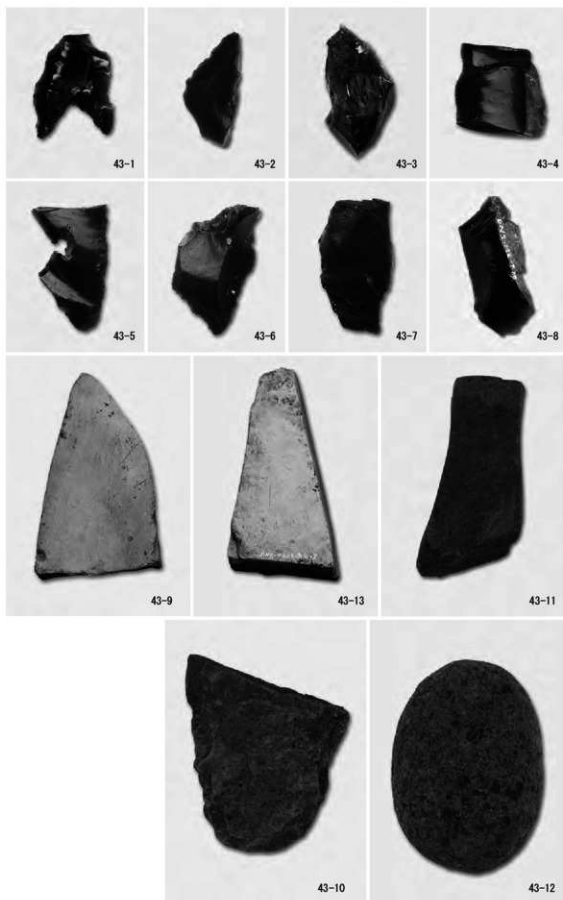












報告書抄録

ふりがな	くくりのいせき 3 おにしいせきのちょうさ
書名	求来里の遺跡Ⅲ 小西遺跡の調査
副書名	県営経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	(3)
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	91
編著者名	若杉竜太
編集機関	日田市教育庁文化財保護課
所在地	〒877-0077 日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行年月日	2010年2月26日

所在地 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おにしいせき 小西遺跡	おにしいせき 大分県日田市 南友田町516-1 大字求来里 2番地 宇小西1406-1ほか	44204-6	204250	33° 19' 01"	130° 57' 55"	20041130 5 20050325	1,740㎡	両端整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小西遺跡	集落	弥生 古墳	竪穴住居跡 14軒 竪穴遺構 3基 掘立柱建物 1棟 土坑 37基	縄文土器・弥生土器 ナイフ形石器 剥片燧 スクレーパー 打製石斧 砥石・投弾 剥片	

要約	<p>小西遺跡は求来里川右岸の沖積地に所在する遺跡で、今回の調査において旧石器時代から古墳時代の複合遺跡であることが判明した。調査では弥生時代後期を中心として、弥生時代中期から古墳時代初期にかけての竪穴住居跡や土坑などが確認された。また、旧石器時代のナイフ形石器や縄文時代後・晩期の遺物が出土したものの、明確な遺構は検出されなかった。</p> <p>求来里川流域では、弥生時代中期から古墳時代後期にかけて集落の存在が確認されているが、時代が下るにつれ、上流へ向かって広がっていく様子が窺える。一方、本遺跡では古墳時代初期を最後に集落が作られなくなる可能性が高く、その後調査地付近において、どのような土地利用がされていたのか、興味深い問題である。</p>
----	--

求来里の遺跡 Ⅲ

— 県営経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(3) —

小西遺跡の調査

2010年2月26日

編 集 日田市教育庁文化財保護課
〒877-0077 大分県日田市南友田町516-1
発 行 日田市教育委員会
〒877-0023 大分県日田市田島2-6-1
印 刷 (有)中央印刷
〒877-0012 大分県日田市淡窓2-3-1